
バカとけいおん！と召喚獣

直井刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとけいおん！と召喚獣

【NZコード】

N4050N

【作者名】

直井刹那

【あらすじ】

バカテスの文月学園にけいおん！のメンバーたちが入ってきて、オリ主や明久たちバカテスキキャラと軽音部で学園生活を過ごしていく物語です。

IJの物語の設定？

この物語は『バカとテストと召喚獣』の一次創作です。
また『けいおん！』とのクロスものです
オリ主が幼馴染の明久ともう1人の幼馴染と
秀吉、雄二、ムツリー等のFクラスメンバーやAクラスメンバーと
そしてけいおん！の唯・澪・律・紬や憂・和・梓たちと
楽しく可笑しく毎日を過ごしていく物語です。
バカテスとけいおん！の話を混ぜながらの話になります。
また、この物語は明久たちが入学してからの物語になります。
1年次はけいおん！メインの物語で、
2年次からバカテスメインにしていきたいと思っています。

物語設定？

この物語は『バカとテストと召喚獣』と
『けいおん！』のクロスものです

設定

- ・オリ主が明久たちバカテスマンバーと一緒におん！メンバーと文月学園にて日々を送っていきます。
- ・明久はもちろんの事、観察処分者です。
- ・オリ主と明久が軽音部に入部します。

原作との変更点

- ・明久は姫路に恋心を抱いていない
- ・開始が2年時ではなく1年時からになります。
なのでオリ話になる可能性があります。
- ・また、1年時はけいおん！メインでいき、
2年時からバカテスマインになります。

また書いているうちに変更する場合があります。
それでも良い方は呼んで頂けると嬉しいです

プロローグ 天然少女との出会い

まだ肌寒い3月。俺達はとある高校に向かつて歩いてた。

智也「……」

陽一「ハア……」

智也「……」

陽一「ふう……」

明久「……」

陽一「あああ……」

智也「……おい」

陽一「……なに?」

智也「わつわからぬやこんだけど」

俺は隣りを歩く俺の悪友である『春原陽一』に向かつて言ひ。

陽一「しかたねエじやん!! 緊張してんだから!!
心臓が破裂しそうな勢いなんだよ!!
だから緊張してんだよ!! ビビッてんだよ!!」

智也「…落ち着けよ。日本語がおかしいぞ。

あと急にテンションあげんな…かなりウザいから

陽一「ウザいとか言つなよー傷つくだろー！」

……はあ。つうか、なんでお前そんなに落ち着いてんの？

今日が何の日か分かつてんのか？」

明久「高校の合格発表の日だよね」

そり。今日は文翔学園の合格発表の日だ。

陽一「そうだよーなのにアナタたちはそんなに落ち着いてるんですか！？」

フツー緊張するもんじょうがーー！」

智也「俺はお前と違つて受かる自信あるしな。

それに明久を見てみるコイツだつて落ち着いてるだろうが

陽一「うわッ！ウゼー！つてなんで明久も落ち着いてるんだ？」

明久だつてあまり成績良くないだろ？こっち側でじょうがー！」

？」

明久「まあそりだけど…」しまできたら腹くくるしかないしね

智也「明久だつてこいつなんだぞ。ほら、わざわざと行くぞ」

陽一「ハア。あいよ…」

今日は俺達が受験した高校の合格発表の日だ。

多くの中学生達が歡喜に湧いたり、悲しみに涙する日である。

だから普通は陽一のように緊張するんだろうが、（コイツの場合は

異常だが…)

俺は普通に合格できる範囲だつたし、試験も解けたから大丈夫という自信がある。

そんなことを考えてたら高校に着いた。

陽一「やべー着いちまつたよ。ヤバいよ・マジヤバいよーー！」

智也「何がヤバいんだ。いいかげんハラくくれバカ」

明久「そうだよ。それに大丈夫だよ。

僕達智也に教えてもらつたんだから大丈夫だよ」

今回の受験のために明久と陽一は智也に勉強を教えてもらつていた。
自慢じやないが中学の時は成績は上位だつたからな。

流石に合格発表の日とあつて学生が多い。

おそらく合格したんだろう、友達同士抱き合つて喜んでいる者、嬉し涙を流している者、ケータイで笑顔で電話している者などがそこにはいた。

陽一「なあ智也君お願いがあるんだけど…」

智也「……なんだよ？気持ち悪いな」

陽一「俺の代わりに合否を見ててくれッ！」

智也「はあ？何でだよ？自分で見りよ」

陽一「極度の緊張により足が動きません…」

智也「お前じんだけビビッてんだよ

……バカなこと言つてないで行くぞ、明久手伝え」

明久「うん」

ガシツ！×2

ズリズリ…

陽一「ちよつ！？やめ、離せ！」

バカなことを言つているアホの襟首を掴んで無理矢理、
合格発表が行われている掲示板に引きずつっていく。

パツ

ドゴォ！

陽一「うザツ！？」

掲示板に着いたので今まで引きずつていた陽一^{バカ}を離す。

陽一「何すんだテメエ！？イテエじゃねエか！？」

智也「うるせエな。わざとだ。それにここまで運んでやつたんだ、
感謝されこそすれ恨まれる筋合いはねエぞ」

となりでまだギャーギャー言つてるバ力を放つて俺は掲示板を覗く。

智也「さて俺の番号ははつと……」

俺の番号は167番だ

智也「おっ あつたあつた」

掲示板には俺の番号が書かれてあった。

智也「やっぱ受かつてたな」

俺が思つていた通り、見事に合格していた。

智也「…で？お前らはどつだつたんだ？」

明久「と、智也！僕も受かつてたよ……」

智也「お、良かつたな明久」

明久「智也が勉強教えてくれたおかげだよ

智也「で、陽一は？」

陽一「…まだ見てない…」

智也「早くしろよ」

陽一「…怖いっす…」

智也「このビデオ…」

陽一「頼むよ？一生のお願いだッ！俺の変わりに見てくれーーー！」

智也「……」こんなで一生の願いなんてするなよ。
まあ土下座でもしたら見てやつても…」

俺は悪ふざけでそういうと

ガバッ

陽一「お願いします」

その場で土下座するアホ。

「こつにはプライドはないのか…

明久「・・・本当に土下座してると

智也「本当にするなよ……わかつた…見るから、土下座やめろ

俺たちがハズかしいから」

陽一「サンキュー…流石、俺の親友だ」

智也「そんな風に思つてんのお前だけだから」

明久「だね」

陽一「…ひビツ…！」

さて、コイツは受かつてんのかね…

陽一の番号を探す……確か番号は159番だな。

番号を探す……

…………

ポンッ

智也「……陽一」

陽一の肩に手を置き、神妙な顔で俺は告げる。

陽一「ど、どうだった…？」

明久「智也、どうだったの？」

智也「……あのは……非常に言こづらいんだが……お前は……」

陽一「……な、なに…？」

明久「え？」

智也「……残念ながら

受かつてたぞ……」

陽一「……そつかあ……ダメだったか……まあ仕方がないよな……
これも運命…………つて受かつてんのかよ！……！」

智也「おおー見事なノリツッコミだな。さすが陽一だ」

陽一「なんでそんな紛らわしいことすんだよッ……！
てゆうか『残念ながら』つなんだ！……！」

智也「そんなの決まってるだろ。面白いからしかないだろ！
それに残念なのは俺だ。またお前と一緒に残念なんだから

陽一「お前最低だな！……！」

智也「まあ落ち着け。良かつたじゃねエか無事合格出来て」

陽一「ぐッ……まあね……そつか合格したんだ俺……良かつた
…………良かつたよー智也くん！……！」

明久「良かつたね陽一」

バツ！

急にバカが俺に抱き付こうとしたので俺は……

ド、オー！……！

陽一「ぶバア！……！」

渾身の回し蹴りを放つてやった。

陽一「イテホじゅねーか！」

智也「気持ちわりイ事してんじゅねエよ……アホが」

男に抱き付かれる趣味はね。

れど、そろそろ退散するか。

何やひ今の一件で立ってしまったようだ。

俺が騒いでいるバカを置いて帰ろうとするど、後ろから突然声を掛けられた。

唯「あの、すいません！け、結果発表、一緒に見てくればせんか！？」

振り返ると、若干癖毛気味の少女がいた。

智也「……はあ？ 何で？」

唯「じ、実は……一緒に来てくれるはずの友達が風邪で
来れなくなつて妹も用事で来れなくなつちゃつたんです……。

」

少女は暗い顔でそういう。

智也「そうか……分かった。

一緒に見てやるからそんな顔すんなって

さすがにそんな顔されたら断りにくいしな。

唯「ほ、ほんとですか！？」

智也「ああ。ほんとだ」

陽一「ねえ僕の時と対応違わない？」

智也「気のせいだ」

明久「気にせいだよ」

陽一「いや、気のせいじゃ うべつ」

俺は陽一を黙らせて（腹を殴り氣絶させて）

智也「じゃあ、ちょっと一緒に見てくるから

明久この陽^{バカ}一のこと頼むわ」

明久「わかった。じゃあ陽一連れて先に帰るね」

智也「悪いな。じゃあまたな」

明久「うん、じゃあね」

俺はそういうと癖毛氣味の少女のところへ向かう。
陽一は明久に頼みつれて帰つても「もう」とした。
居ても皆さんの邪魔にしかならないからな。

……………

智也「ほう、セーので見るからな」

唯&智也「「セーのー！」」

自分の番号でもないのに一瞬、ドキッとする。

唯「あ、あつた！やつたー！！！」

あ、そうだ。自己紹介遅れました！

私、平沢唯です。唯って呼んでくださいー！」

智也「俺は中川智也だ。よろしくな平沢」

さすがに初対面の人間を名前で呼ぶのはな……

唯「トモ君だね！！！」

アレホ？いきなり下の名前で？しかももうあだ名かよ。
ちょっとハズかしいんだけど……

そこへ一人の女の子が駆け寄つてくるのが見えた。

憂「お姉ちゃん！」

唯「あ、憂だー！」

智也「……妹さんか？」

憂「用事早く済んだんだ。お姉ちゃん、」の人は？」

唯「あ、紹介するね。掲示板一緒に見ててくれたトモ君だよー。」

憂「お姉ちゃんがお世話になりました。トモさん」

智也「いや、別に俺は何もしていないよ。

それと俺の名前は中川智也っていうんだ。よろしく

憂「あ、失礼しました。智也さん。よろしくお願ひします。
お姉ちゃん、あだ名付けるのが好きなんですよ！」

そうなのか？

ハズかしいからやめてほしいんだが

唯「トモ君、メアド交換しようつよー。」

智也「トモ君はやめる。ハズかしいから。まあメアド交換はかまわ
ないが」

唯「ええー。可愛いの！」

可愛いってあまつづれしくないな……。

憂「私もいいですか？」

メアド送信＆受信完了。

憂「あの～、よひしければ智也さんも一緒に夕飯どうですか？
といつても、レストランなんですけど・・・。」

唯「ひとつおこしこんだよ！一押しなんだよ！」

うーん、どうするかな。

でも、何かアレだな。

さすがにそれは気まずいな・・・。

智也「・・・遠慮してくれよ。家族でじゅうぶん・・・」

唯「えええ～～！～！」

俺が断りきると平沢姉が声をあげる。

憂「お姉ちゃん、無理言つたらダメよ」

妹は必死に姉を宥めている。余計、断り辛い・・・。

智也「わ、わかった。目線痛いから、そんな顔するな！」

憂「え？良いんですか？智也さんはご家族とは予定ないんですね？」

智也「ああ両親は海外で仕事してて俺、一人暮らしなんだ。」

だから別にかまわないんだが良いのか俺なんかがお邪魔して

さすがに今さつき知り合った人間が
いきなりご家族と食事なんて少し気まずいからな。

憂「それは大丈夫ですよ」

～平沢家～押しのレストラン～

平沢・父「智也君も大変だね」

智也「い、いえ・・・でももう慣れてましたから」

憂「あ、お姉ちゃん！ 口にソースが・・・」

唯「え、どこど〜？」

憂「動かないでお姉ちゃん！」

唯「ありがと、憂～」

本当にできた妹さんだな。

結局、俺は平沢姉妹と一緒に食事に行く事になり、「馳走にまでな
つた。

キャラ紹介（1）

中川智也
なかがわともや

性別：男

誕生日：9月10日（乙女座）

身長：182cm

得意教科：英語・数学

苦手教科：古典

趣味：読書・ゲーム・バスケ・音楽鑑賞・ギター・ベース演奏

特技：料理（明久にはかなわない）・ギターとベース・バスケ

外見：見た目はクラナドの岡崎朋也で、髪の色・目の色は黒、左眉に切傷痕があるので見た目はヤンキー。

性格：中身は家庭的で、女心にも疎い朴念仁。だが、変な所で鋭い。

また、温厚で面倒見も良く陽気な性格であり友達思い。
そして負けず嫌い。

・運動神経がよく、中学時代はバスケ部の部長だった。
・運動神経がいいため雄二並の武力を持つ。

また、成績も優秀で中学時代では常に上位をキープしていた。よつて文武両道。

- ・明久と陽一とは幼稚園からの付き合い。
- ・食べる事が好きで鞄の中にお菓子を常備している。だが、味覚はお子様で酸っぱい物やワサビが苦手。寿司屋ではサビ抜きでいつも頼んでいる。
- ・両親は海外にて仕事をしているので1人暮らし中。

使用楽器
ギター：ホライゾン

春原陽一
すのはらよういち

性別：男

誕生日：2月17日（水瓶座）

身長：167cm

得意教科：保健体育

苦手教科：保健体育以外の全て

趣味：読書・ゲーム・サッカー

特技：サッカー

外見：クラナドの春原陽平

性格：陽気な性格であり友達思いで、家族思い。

- ・サッカー部の先輩が、同級生をいじめている現場を発見し、それを助けるが、暴力を使つたため退部した。このため運動神経だけは優れている。

- ・不良として悪名が立つていて、事を荒立てることを嫌うので、周囲からは「ヘタレ」のレッテルを貼られ、不用意な言動が原因で他者から痛い目に遭わされたり、いらぬ誤解をされることが多い。

しかし心身とも丈夫で立ち直りは早い。

・智也と明久とは幼稚園からの付き合い。

・元々黒の頭髪を染髪して金髪にしている。

鉄人によく注意されているが本人は直す気はない。

・妹の芽衣に対しては普段邪険に扱つていて、大切に思つて

いる。家族思い。

・異性に対する興味が旺盛で、魅力的な女子を見つけてはすぐナンパしたがる。

しかし成功した試しは今だなし。

・勉強は苦手だが、関心事に対する集中力には目を見張るところがある。

キャラ紹介（1）（後書き）

皆さんの感想お待ちしています。

入学式の朝

桜の季節の4月某日。

智也「…よしつ」

俺は鏡の前で自分の姿を確認する。

中学の制服の学ランとは違い、ブレザーを着た俺がそこに映つていた。

まだ着慣れない高校の制服だが、まあ其の内慣れるだろう。

智也「…しかし相変わらずの面だな…」

俺は顔にコンプレックスを抱えている。

顔というよりは『目』だな。俺は『ツリ目』なのだ。
さらに小学校のときに怪我をして左眉のところに傷が少しある。
なのでヤンキーと間違えられていたりする。
最初の頃は髪を伸ばして傷を隠していたが
鬱陶しいのもあり、今では何もしていないが……

智也「そうだ。明久に電話してみるか。

なんとなくまだアイツ寝てそうだし」

俺は明久のことが気になり電話をかけてみる。

プルルルル

明久「はい、もひもひ、吉井ですか？」

智也「おはよう明久。今起きたみたいだな」

明久「ん？あれ？智也どりしたの？」

智也「いや、お前の事だから寝坊するんじゃないかと思つてな」

明久「え？つて、ええ！？もひ」「んな時間なの！？」

智也「ありがとう！電話もうつてなきゃ寝坊するといふだつた
よ」

智也「じゃあ、起きた事だし入学式の時ぐらには遅刻するな。
……あとおそらくないと思つが間違つても姉の制服着てくる
なよ」

明久「そんな間違にするわけ・・・・・・ナイジャナイカ」

智也「おい、今の間は何だ？しかも最後なんで棒読みなんだ？」

明久「えっと昨日準備していた制服が姉さんの制服だった・・・・

・

智也「そつやくじゃないか！？」

一応言つておくが俺達の制服はブレザーだからな

明久「う、うん。ちやんと確認してから着るよ」

智也「じゃあ、また学園でな。遅刻するなよ」

明久「うん。じゃあ、また学園で」

俺は電話をきる。

智也「わたりと、俺もそろそろ行くか。」

今日は高校の入学式だ

途中でパン屋に寄り、カフェオレとパンを買って、店を出ると…

タツタツタツタツ

智也「ん？」

足音か…？ 頭がする方に視線を向けると…

智也「平沢？」

視線の先には平沢がこちらに向かつて走つてきていた。
そして俺に気付く事もなく通り過ぎて行つた。

智也「どうしたんだあいつ？あんなに急いで」

時計でも見間違えて、遅刻だと思ったのか？まさかな。

・・・・・明久や陽一みたいなヤツはそういういなによ。

学校に近付くにつれ、段々と学生の数が増えていく。
歩いていると校門に着いた。

そして同時に見知った人物も見つけた。

その見知った人物『平沢』は、ぼーっと突っ立つて校舎を眺めていた。

周りの上級生や新入生はそんな彼女を一瞥し、過ぎ去つて行く。
あんな場所（校門のど真ん中）に立つていられたら
皆の邪魔になるので声を掛ける事にした。

智也「おはよウ平沢」

唯「ん？ あつー・トモ君ーーおはよウーー！」

声掛けるとひらりを向き、途端笑顔になる平沢。

智也「校舎見上げて何してたんだ？」

唯「いやあ？ 恥ずかしいんだけど時計、見間違えちゃって……

智也「ん？ どうこいつ事だ？」

ま、まさか・・・・・・

唯「朝起きて時計みたときね、『遅刻だー』って

思つて急いで学校に向かつたんだ」

智也「……」

唯「んで 学校に着いて時間確認したら、

『あれっ！？時間見間違えたあ！？』って想ひて
ぼーっとしてたんだ。いやつへお恥ずかしい

そつ言つて頭をかく平沢。

(マジか…まさかあの2人と同じようなヤツがこるとは)

唯「どうしたの？トモ君？」

俺が黙つたままだったので、顔を覗き込んでそつ尋ねる平沢。

智也「気にするな。ちょっと考え事をしてたんだ

唯「やうなんだあ

智也「クラス分け、もつ発表されてるんだろう。そつと見てる

唯「うん… そうだね」

「せ

俺は平沢と一緒にクラス分けを見に行こうとする

? ? ? 「唯？」

と誰かが平沢を呼ぶ声がした。

唯「あつー！和ちゃん

「

『和ちゃん』と呼ばれた平沢よりも短い髪に眼鏡をかけた女子が俺達に向かつて歩いて来た。

智也「知り合いか?」

唯「うん! そうだよ! 友達なんだ」

和「珍しいわね。唯が私より先に学校に来るなんて」

唯「いやーははは…ま、まあねえー」

『時計を見間違えて早く来た』とは言えないよな。平沢は冷や汗をかきながら曖昧に返事をしている。

和「ねえ 唯、この人は?」

『和ちゃん』と言われる女性が俺の方を向き平沢に尋ねてきた。そりや当然の疑問だよな。

友達の横に見知らぬ人物が居ればそういう質問になるよな。しかも俺の見た目はヤンキーみたいだからな。

俺が自己紹介しようとすると

和「もしかして、あなたがトモ君?」

智也「えつー?」

何で俺の事知つてんだ!? まさかエスパーか!? しかもトモ君呼ぼわり!? やめて! 恥ずかしいから! —!

唯「うん! そうだよ、この人がトモ君だよ」

智也「ええっと和さんだけ? なんで俺の事知ってるんだ? それとトモ君はやめてくれ。かなり恥ずかしいから」

唯「ああ『ermenなさい。唯から聞いてね。』『新しい友達が出来たんだ』って」

智也（なるほどな、平沢から伝わったわけか。）

そつ思い、平沢に視線を向けると…

唯「えへへ」

と嬉しそうな笑顔を浮かべていた。

そんな顔されるとこちらが照れるじゃ ないか

和「じゃあ自己紹介するわね。真鍋 和です 唯とは幼馴染みなの」

唯「私達ずっと一緒になんだよ」

幼馴染みか、俺と明久、陽一みたいなもんか。

…いやあの陽一と一緒にされたら可哀相だな。

智也「俺の事は平沢から聞いてると思うが… 中川智也だ。これからよろしくな

和「ええ、じゅうじょよろしくね」

入学式の朝（後書き）

和ちゃん登場です！

皆さんの感想お待ちしています

入学式の朝（バカ登場）

俺達が互いに自己紹介を終えようとしたとき

陽一「そして俺が智也の親友の春原陽一・ヨロシクー！」

朝からテンションの高いバカが出現した。

唯・和「わっ…」「

急に出てきたバカに驚く平沢と真鍋。

「イツは必要な時には出てこはず、全く必要ない時に出て来るな……

智也「お前じつから湧いて出てきた？」

陽一「ヒドいな。人を虫みたいにいうなんて傷つくじゃないか」

智也「いや、お前は虫じゃないだろ」

陽一「当たり前だ」

智也「お前と虫が一緒になんて虫が可哀想だらうが」

陽一「え…? ナーソレ。虫の心配…? 俺虫以下の…?」

智也「なに当たり前なこと言つてんだよ」

陽一「当たり前なのか…? アナタヒドイよ…!」

智也「デケヒ声出すな、うるせヒシウザヒキモイイし」

陽一「そうさせたのアナタでしょうがーー！」

樂しいか！？こんなことして樂しいのか！？
つてキモいつてなんだよーー！」

智也「非常に樂しい。お前をからかうことが俺の生きがいだ」

陽一「最悪だアーーー」「コイツーーー！」

やつひ言つて頭を抱える虫以下生物。

……ああ楽しいなあ。

さてコイツをからかうのはこれくらいにするか、
合格発表のとき同様、周囲からの視線が痛いし……

それに……

唯・和「…………」

平沢と真鍋がポカンと口を開けていた。

和「…………えーっとその人は？」

と真鍋から質問が来た。

智也「コイツはー応俺の……友達なのかな？いや、悪友か？」

陽一「一応つてなんだよ。しかも何故、疑問系だ…しかも悪友つてなんだよ」

未だに頭を抱えている陽一が先ほどとは真逆のテンションで呟くように俺に言つてきた。

智也「そっちのほうが面白こからな

陽一「アナタ、本当に最低ですよね」

智也（大丈夫。こんなことするのはお前だけだから）

あえて口にはしないが……

明久「智也ー！陽ー！おはようー！」

そこで明久も合流した。

智也「おはよう俺の親友の明久

陽一「つて明久は親友で僕は悪友なのかよ

智也「当たり前だろ」

陽一「コイツ本当に最低だー！」

明久「ねえ智也？」この人たちは？」

智也「ああ1人は明久も見たことがあると思うが、

合格発表の日、一緒に見た平沢で、こちらは平沢の幼馴染の

真鍋だ」

明久「あ、初めまして吉井明久です。よろしくね」

唯「あつ私は平沢唯だよ」

和「真鍋和です」

明久とついでに陽一に自己紹介をする2人。
すると頭を抱えていた修司は立ち上がり。

陽一「春原陽一です！智也とは親友やつてます！」

満面の笑みで本田一度田の自己紹介という快挙を成し遂げた。

唯「うん…よろしくね明久君、陽一君…」

和「よろしく」

陽一「ヨロシク！唯ちゃん、和ちゃん」

明久「よろしくね平沢さん、真鍋さん」

わつかはあんなにへ「んだたというのにすぐさま元のテンションに戻る。

……切り替え早エな
しかも陽一はいきなり名前で呼んでるし……

唯「明久君と陽一君は、トモ君とはいつからの付き合いなの？」

おい、陽一のまえで『トモ君』って呼ぶなよ..
絶対このバカにからかわれる。

明久「僕と智也と陽一は幼稚園からの幼馴染みなんだよ」

陽一「なんだよね」

唯「く？ そつなんだ。私と和ちゃんも幼馴染みなんだよ」

陽一「なんだ？」

智也（あれ？ 気付いてない？）

呑氣に平沢と会話をする陽一。

—イツかバカでアホで良かーた！

唯「そういえばトモ君と一緒にクラス分け見に行くんだった。
せつかくだし皆で行こうよ」

智也「そうだな」

陽一「トモ君？」

げえ！？ 気づいた！？

「ついでに『細胞世界』だから『トモロ』」

陽一「トモ君…………トモ君…………クツ…………クツクツ」

何へお前、唯ひせうから『トモ君』つて……ハツハツ——

……って呼ばれてんの！？

アツハツハハハハハハハハ！！！！

腹を抱えながら俺に指をさし、大笑いする陽一。

唯「？」

平沢は状況が分かつてない様子。

智也「……」

そして黙つたままの俺。

明久「陽一、そろそろ笑うのやめないと僕知らないよ

陽一「アツハツハハハハハハ！！！！

ヤベえ笑いすぎて腹イテエ」「

そろそろ黙らせるか……

グッ

体の重心を少し落とし……

そして左足を軸足にし、右足を振りぬく！

智也「消し飛べ！！！！！」

ドゴォン！！

陽一「あぶらッ！－！」

陽一の腹に蹴りをいれる。

3メートル近く吹っ飛びピクリとも動かなくなる陽一。

唯「えつ！？」

絶叫する平沢と

和「やり過ぎなんじやないの？」

あくまで冷静な真鍋。

明久「だから言つたのに」

智也「大丈夫だろアイツなら。

……ほらしい加減クラス分け見に行こうぜ」

和「そうね…行くわよ、唯」

吹っ飛んだ陽一の方を眺めている平沢に声をかける真鍋。

『さうね』ってなかなかいい性格してると、真鍋は…

唯「えつ！？陽一君はどうするの！？」

智也「一人になりたいんだって」

唯「う、うん…そ、うなんだ」

陽一をそのまま放置し、俺達はようやく、学校内へと歩き出した。

クラス分けの結果は

平沢と真鍋とも同じクラスになった。

ついでに陽一のヤツとも同じだが……。

明久とは別のクラスになってしまった。

1 - A

春原陽一・中川智也・平沢唯・真鍋和

1 - C

秋山澪・木下優子・霧島翔子・琴吹紬・田井中律・姫路瑞希

1 - D

木下秀吉・坂本雄一・島田美波・土屋康太・吉井明久

という風になつた。（あいづえお順にて記載）

初日は簡単な自己紹介で終わつた。

入学式の朝 「バカ登場」（後書き）

最後にバカテスメンバーとけいおん！の
メンバーの1年次のクラス分けをしてみました。
愛子は転校してくるのでいません。

皆さんの感想お待ちしています

雄一たちとの出会い（一）

（1-Aの教室・放課後）

入学して2週間が過ぎた。部活はまだ検討中・・・・。

そんな事を考へていると真鍋たちの話しが聞こえた。

和「唯、まだ部活に入つてないの？」

唯「何かしなくちゃいけないと思つてるんだけど・・・」

和「あ・・・いやって一ートが出来上がりついへのね・・・」

智也「・・・さすがにオーバーじゃないか？」

つてかもしそうなら俺も二ートの一員ではないのか？

唯「トモ君は部活決めたの？」

智也「俺もまだ決めてない

和「・・・アナタもなの？」

何その視線は・・・そんな目で俺を見ないでくれ

「でもまあバスケ部にでも入るうかなとは思つてるがな

和「バスケ部に？」

智也「そう。だけど」「ひてそこ」までバスケ強くないから迷つてるんだよ」

和「確かにここバスケ部が強いなんて聞かないわね」

智也「だろ。だからまだ検討中なんだ」

俺は話をきりあげると帰り支度を済ませる。

陽一のバカはどこかに行つてるから明久と帰るかな。

（1-Dの教室・放課後）

雄一「やれやれ……やつてもいなうこと」に文句ばかり抜かしやがって

雄一は中学の頃は悪鬼羅刹と呼ばれていて少し性格が悪い。

雄一は廊下を独りぐらう。

そして1人で帰り支度をすませていると、

雄一「つと、と・・・・・・」

誰かの机にぶつかり中に入つていた教科書が落ちてしまった。

雄一「」の時期からも「」のザマとは勉強熱心なヤツだな

とりあえず雄一は落としてしまった教科書を拾おうと手を伸ばす。そしてその惨状に気がついた。

雄一「・・・これは酷いものだな・・・・・・」

そこには表紙は破れ、ページはぐちゃぐちゃになっていた。新品で受け取ったばかりなので普通に使用していればまずはこうならない。

雄一はその教科書を拾い裏表紙を見ると

そこには『島田美波』と名前が書かれているのがわかつた。彼女はドイツからの帰国子女でまだ日本語が上手く言えないみたいだった。

雄一「そういえばあいつ、初日にクラスの連中を『ブタ』呼ばわりしてたつけ」

おそらく本人は意味をよく理解せずに言つたのだろうが、それに腹立てた連中がやつたんだろうな・・・

雄一「・・・・まあいいか。俺には関係のない事だ」

雄一はそれをしばらく観察してから、机の中に戻そとする。

その時だった

雄一「つー？」

目の端に高速で動く何かが映った。

頭が判断する前に体が勝手に反応し、その場から大きく飛びのく。

間一髪で回避が間に合い、目の前の誰かの拳が通過する。

この時点でようやく、誰かが俺に殴りかかってきた、といふことを理解した。

雄二は体勢を立て直し、拳の主を見る。

そこには

明久「……………」

雄二とは入学初日から因縁のある人物だった。

雄二「どうじつもりだ、テメエ」

雄二は静かに明久に問いかける。

2人は互いを快く思っていないかった。

雄二は明久のバカさ加減が気に入らず、

明久は入学式の時、雄二がある女性に話しかけられても無視し続けたので、

理由を聞こうとして、入学式初日から騒ぎを起こしたりしている。

明久「…………なに……やつてんだよ……」

雄二「それを聞きたいのはこいつのまつ」

明久「オマエ、その子の席で何やつてるんだって聞いてるんだよー！」

いつものマヌケな姿からは想像つかないような怒鳴り声をあげる明久。

その視線は雄一の右手へと向いていた。

・・・・・正しくは雄一の持つてゐるボロボロの教科書へと。

雄一の脳内では今の状況を整理していた。

雄一の右手のボロボロの教科書・無人の教室
校内に流れる雄一の風評・吉井の先ほどの台詞

それらから思い浮かぶ一つの結論。

雄一「……ま、まさか……おい待て吉井。俺は」

明久「歯を食いしばりやがれこのクズ野郎っ！」

雄一「チツ、このバカ野郎が……落ち着け！これは俺がやつたわけじやねえ！」

明久「ブチ殺す！」

雄一「人の話を聞きやがれ！」

明久は完全に雄一の話を聞いてない。

雄一「なら、ちょっとくら相手してやらあー！」

と、雄一の言葉をかわきりに殴り合いが始まる。

明久「……絶対に……ぶつ飛ばす……！」

雄一「しつけえなーまだやんのかよー！」

雄一は明久と殴りあいながら明久の事を考えていた。

雄一（なんでコイツは、諦めないんだ……？

俺と「コイツじゃ、どつちが強いなんて一目瞭然だろ）

雄一の思つてゐる通り、雄一に比べ明久のほうが傷が多くつた。

雄一「いい加減にしろ、クソバカ野郎が！」

雄一は明久と戦いながら小学校の頃の苦い思い出が蘇る。

明久「……可哀想……じゃんかよ……」

雄一「あアー？」

雄一は一瞬何を言つてるのかわからず聞き返す。

明久「可哀想だと思わないのかよ！あの子は日本に来て
知り合いがいなくて、言葉がわからないのに、
それでも一人で頑張つているんだぞ！

どうしてそんな頑張つている子を虐めるんだよ！」

ボロボロのはずの明久は、力の籠もつた声でそう言つた。

雄一はそんな明久を見て前にも同じような状況を見ている気がした。
いや、違うか。俺はコイツと違つて逃げようとした。

雄一は我が身が大事だった。

だが、明久は

明久「オマエみたいなヤツ許せるもんか！」

ガツン！　と一際大きな音が響いた。

明久は先ほどと比較にならないほどの勢いで吹き飛んだ。

そして雄二も明久の攻撃を食らい視界が揺らぐ

雄二「吉井！ そんなに俺が気に入らないのならかかってきやがれ！
2度と立てないくらい殴つてやらあ！」

明久「言われるまでもない！ オマエをぶつ飛ばして後悔させてやる
！」

雄二「いじりやいやひつむせえんだよー」この雑魚が！

そしてお互いの拳が届く距離まで駆け寄つたところで

智也「そこまでだ！」　康太「……そこまで」

明久・雄二「つー？」

突如2人の前に人影が入ってきた。

雄二の前には智也が拳を受け止め、康太は明久の目の前にペン先を
向けていた。

雄二「邪魔するな！ テメエらには関係ないだろ？ がー！」

康太「……それ以上暴れてもうつては困る」

智也「そうだ。『イツの言うとおりだ』

康太「…………カメラが壊れる」

3人「「「…………はあ？」」「」

康太の意味の分からない言葉に

雄二と明久だけではなく智也まで疑問符をあげる。

智也はてっきり2人の喧嘩を止める為に手伝ってくれたものかと思つていたのだ。

康太はそういうと教室のスミに行きゴソゴソと何かを取り出した。
……あれはＣＣＤカメラか？でもなんであんな所に？

智也「…………まさか盗撮か？」

康太「…………っ！（ブンブンブン）」

康太はすごい勢いで否定している。

雄二「…………けつ。なんだか気が削がれちまつた。命拾いしたな吉井」

雄一はそう言いつと鞄を肩に担ぎ明久に背を向ける。

明久「待てよこの野郎！」

雄二「ぐがつ！」

明久は帰ろうとする雄二の肩を掴んで殴りつける。

智也「おい！明久落ち着けよ」

雄一「…………まだ続けたいようだな吉井」

再び一食触発の雰囲気にかわる。

智也「おい、お前らいい加減に！」

俺が2人をとめようとすると

??.?「キサマハ、何をやつとるかっ！」

3人「「「つ…」」」

突如野太い声に阻まれた。

秀吉「ビハジヤ？頭は冷えたかの？」

そこには女顔で爺言葉を使う同級生。木下秀吉がいた。

智也「今の声もしかしてオマエか？」

秀吉「ビハジヤ？似ておったかの」

一時は秀吉に氣をとられて「いる」と明久が雄一に殴りかかるとしていた。

明久「離れて木下さんつーくたばれ、この」

雄二「けつ、ホントにしつこい野郎だ」

智也「お互いいい加減にしとけよ」

ダン！！

俺は2人に前に出て2人の手を掴み床へと叩きつけた。

智也「せつきから言つてるよな。やめろって。ってかなんだこの状況は。

「こじが騒がしいから覗いてみたら2人が殴り合つてるし」

明久「智也止めないで！僕はこの外道をブチのめさないといけないから

雄二「けつ、できるもんならやつてみやがれ」

智也「なんだ2人とも、まだやる気なのか？

それなら俺も本氣でやらせてもらうが？」

秀吉「まったく・・・・。理由は知らんが、
教室でコレ以上暴れられるのはワシもクラスメイトとして見
逃せん。

事情を聞かせて貰えんじゃねえか

明久・雄二「フンッ！」

智也「すまないな……えつと……」

秀吉「ワシは木下秀吉じゃ」

康太「…………土屋康太」

智也「ああ、木下と土屋か。俺は中川智也だ。
こいつ等を止めるのを手伝ってくれてありがとう」

秀吉「よいのじゃ。クラスメイトじゃからのう」

康太「…………自分そのためだ」

智也「で、何が原因なんだ？」

だが、2人は何も喋らうとしなかつた。

秀吉「やれやれ参ったのう」

智也「これじゃ あサッパリわからないぞ」

康太「…………（スッ）」

智也「ん? 何だこれは」

康太「…………見るといい」

そんな中、康太はカメラをいじり動画を見せてくれた。

秀吉「…………脚しか映つておらぬが?」

智也「…………土屋。やつぱり盗撮を」

康太「・・・・・（ブンブンブン）」

物凄い勢いで否定する康太。

2人も不満気であるが動画を見るにした。

雄一たちとの出会い（2）

その後、動画を見ていくと放課後教室の掃除をしている時に島田の教科書が落ちてしまい、掃除している人たちは話に夢中で気づいていなく、気づいた頃にはすでにボロボロの状況だった。

康太「…………これが真相」

康太が画面を操作して画面を消すと、

明久「…………めんなさいっ！」

明久が突然雄一に深々と頭を下げ謝りだした。

雄一「なんだ、いきなり」

明久「その、もう、なんてお詫びしていいか…………
とにかく坂本君気がすむまで僕を殴つて」

雄一「いや。もうお前を殴る場所ねえし」

明久「あ、そつか。えっと、それなら――」

智也「どうしたんだ明久。突然？」

明久「あ、うん。実は――」

つまり明久は雄一が島田の教科書をボロボロしたと勘違いして

この惨状が出来上がったわけだ。

秀吉「しかし、坂本も坂本じゃな。きちんと説明したら良かつたものを。

あの様子じゃと説明しておらぬようじやのハ」

雄二「…………ふん！」

秀吉「何か事情があつたのかのつ？」

雄二「お前には言つてもわからねえよ木下。
んじゃ、用事が済んだから俺は帰るぞ」

明久「あ、うん。また明日、坂本君。それと、本当に『メン』

雄二「けつ」

雄二は明久に背を向け再び鞄を肩に担ぐ。

明久「ねえ智也、木下さん。新品の教科書つて
どこに行けばもらえるか知つてる？」

智也「新品の教科書か・・・・・・」

秀吉「うん? いや、ワシは全然知らんが」

智也「明久。言つておくが秀吉は男だぞ」

明久「え?」

智也「いや、普通わかるだろ?」

秀吉「中川おぬしはワシが男じゃとわかるのか?」

智也「はあ? 当たり前だろ」

秀吉「よ、良かつたのじや。」

皆、ワシのこと女子じやと勘違いしておつてのう」

智也「大変なんだな木下も。それより教科書だ。土屋はわかるか?」

康太「…………（フルフル）」

明久「そつか。購買には売つてないかな?」

智也「購買には売つてないかもな。
もしあつたとしてもこの時間だともう閉まつてるぞ」

明久「ならコピーして」

秀吉「何枚コピーするつもりじや…………」

康太「…………そもそもきちんとした教科書にならない」

明久「じゃあ、アイロンをかけるとか」

智也「服じゃないんだから無理だろ」

明久「僕の教科書に入れ替えるとか」

秀吉「配布された日に全員名前を書いたじゃろうが。
お主の名前が残つておつては入れ変えられんぞ」

康太「…………根本的に解決していない」

明久「連帯責任で皆の教科書もボロボロにする」

秀吉「確かに島田の教科書は目立たなくなるかもしけんが…………」

智也「迷惑だろ」

明久「じゃあじゃあ」

雄二「あーもうつー頭悪いなテメエラは!
んなもん教師に説明すればいいだろうが」

明久「あ、そつか。悪い事してるわけじゃないもんね」

秀吉「そういえばそうじやな。坂本よ。よく教えてくれたのう」

康太「…………盲点だつた」

智也「さすが坂本。優しいな（ニヤニヤ）」

雄二（コイツ最初から気づいてやがったな）

明久「あ、坂本君ありがとう。助かつたよ」

雄二「…………」

坂本が教室から出ようと扉に手をかけると

西村「待て、坂本。」
「何をしている」

皆「「「「「つー?」」」」

明久「筋肉教師・・・・・」

西村「西村先生と呼ぶ」

やばいな。今の状況は。

今教室の状況に明久と雄一の傷跡がある。言い逃れはできない。

明久「先生すみませんっ」

西村「むおつー?」

そこで明久が上着を脱いで筋肉教師の顔にかぶせる

康太「・・・・・失礼」

さらに康太がどこからか取り出したケーブルを上着の上から巻きつけ
簡単に取れないようにする。

秀吉「今のうちにちからにげるのじゃー。」

木下が窓を開けそういう。

が、それは嘘だ。明久たちは扉から脱出し、身を隠す。

俺は匪役をかい、窓から地上に着地し、逃げる。

西村「待て、貴様ら！逃がさんぞ」

筋肉教師はまんまと策にひつかかり俺を追いかける。

俺はそのまま筋肉教師から逃げつけたが、体力が持たずにつかまつてしまつた。

その後、結局明久たちも捕まつたが教科書はなんとかなつたみたいだ。

あの後教師が誤つて新品の教科書を廃品回収にだしてしまつたので、それを明久と雄二が回収車を追いかけなんとか追いついて教科書を手に入れたみたいだ。

その件もあり明久と雄二は仲が良くなり、名前で呼び合つようになつた。

もちろん、協力してくれた秀吉や康太。俺とも仲が良くなり名前で呼び合う仲になつた。

雄一たちとの出合二（2）（後編）

今回は雄一たちを登場させました。

長文になつたため、2話構成で描いています。

皆さんの感想お待ちしています。

軽音部つて何かな？

（後日、Dクラス）

午前の休憩時間

雄一「おい、明久Bクラスのやつらが購買のパンをかけて
バスケやらないかって言つてるがどうする？」

明久「パン！ やるやる。今月は食費がヤバかったんだだから助かる
よ」

雄一「ならメンバー集めるか」

康太「…………手伝つ」

秀吉「ワシも参加させてもらひつかの。なにやら楽しそうじや」

明久「なら僕は智也に声掛けてくるよ」

雄一「ああ、今日の昼休みだからな」

（Aクラス）

俺は陽一と話をしていた。

智也「そういうえば陽一は部活なにかするのか？」

陽一「ん？あー俺は帰宅部だね。いい女探しに行くからな」

智也（あー。コイツらしき理由だな）

陽一「そつこつお前は？」

智也「まだ考え中だ。まあそろそろ決めなことな」

陽一「まあ智也は頭もいいし、運動も出来るし、音楽も出来るからな。

でもバスケでもするのか？」

智也「まあやるなら自分の好きな」としたいからな

俺と陽一が話していると明久がやつてきた。

明久「ねえ智也。今日の昼休み、Bクラスの人たちと
購買部のパンをかけてバスケしない？」

智也「ああ、いいな。乗った。雄一たちもやるんだろ」「

明久「うん。あ、陽一もどう？」

陽一「もちろん。僕もやるよ」

明久「じゃあ今日の昼休み体育館だよ」

俺達が会話をしていると今度は平沢が話に入ってきた。

唯「ねえトモ君、軽音部って何かな?」

智也・明久「軽音部?」「

なんていきなり軽音部なんだ?

唯「私ね、軽音部に入部したんだけど何するのかよく分かんないんだあ」

智也「何するのか分からぬのに入部するなよ

…てか軽音部つていつたら…ギター弾いたり、ベース弾いたりして、

バンドとか組んだりするとこうだろ

陽一「へえ~」

唯「えつ ギター…? バンド…?」

そんな単語がでてくるとは思わなかつたみたいな顔をする平沢。
そして陽一お前も知らなかつたのか?

唯「ええ! ううなー? 私、軽い音楽つて書くからてつき
簡単なことしかとやらないと思つたのに…」

智也「簡単なことってなんだよ?」「

唯「口笛とか…」

智也「なんだそのやる氣のない部活」

明久「そうだね」

唯「和ちゃんにも言われた……」

口笛をする部活ってなんだよ……かなりシユールだな。

和「じゃあ 何なら弾けるの？」

俺達の会話を聞いていた真鍋が平沢にそう聞いてきた。

唯「ん？…………力、カスタネット……」

和「……すごく似合つわ……」

智也「…………同感」

陽一「カスタネットか凄いね唯ちゃんは

明久「陽一…………」

なんか1人変な事言つてるがスルーするか

キーン　コーン　カーン　コーン……

休憩時間の終了を告げるチャイムが鳴る。

唯「どうじょう和ちゃん？……」

和「じいじょうひて言われても……」

智也「大変だな真鍋も……」

平沢は真鍋に泣き付いていた……

明久「じゃあ昼休みに」

智也「おつ」

昼休みのバスケはもちろん俺達が勝つておじいちて貰った。

人部

放課後になり明久が俺を待つてる間に、帰りの支度をしていろと…

唯「あの～トモ君、アキ君」

智也「ん？」

明久「え？」

平沢に呼び止められた。

つてかもうトモ君言われるのには慣れた。といつかもつあきらめた。
それに何故か明久もアキ君言われてるし

唯「あのね…お願いがあるんだけど…」

智也「…………どうしたんだ？」

明久「何かあつたの？」

唯「えっとね…………軽音部の部室に一緒に行つてもらえないかな
？」

今まで俯いていた顔を上げそなことと言ひ平沢。

智也「なんで？」

…まあ理由は想像つくけど。

唯「それは、軽音部に辞めますって言いたいんだけど

…一人じゃ心細いし、軽音部に怖い人がいたら恐いし…」

…やつぱりか…

智也「何で俺たちなんだ?別に悪くないが真鍋に頼めばいいじゃないのか?」

唯「…和ちゃん、生徒会があるからつて断られちゃった」

お願いだよー?トモ君とアキ君しか頼れる人いないんだよー!」

やつぱり俺に泣きながら抱き付いてくる平沢。

智也「つて、なんで抱きついて来るんだ!?ひとまず離れる」

唯「やだつ!一緒に行つてくれなきゃ離さないッ…」

早いとこ、この状況をなんとかしなければならない。
なぜなら、周囲からの視線が痛いからだ。

俺に泣きながら抱き付く平沢。

その平沢を引き剥がすとする俺。

更に平沢が「見捨てないで」だの「一人はイヤだ」なんて言つもん
だから…

女子A「中川君、平沢さんに何したの?」

女子B「平沢さんかわいそづ…泣いてるよ…」

「… という、俺がまるで悪人の様な誤解をあたえてしまつてゐる… これ以上「離せ」「イヤだ」の押問答を続けるわけにもいかない。」

それに女子に抱き疲れるなんて今までなかつたから恥ずかしい。

智也「つてか誰も行かないなんて言つてないだろ。

「おひやへりて、おひやへりて、良いよ。」

唯一本当に！？

明久 優しいね智也は、平沢さん、僕も一緒にいくよ」

先ほどまでの泣顔が嘘の様に途端に笑顔になる。

唯「ありがと、トモ君！アキ君」

俺は泣き止んだ平沢を連れて明久とともに軽音部の部室である音楽室へと向かった。

音楽室前

階段を上つて、ようやく音楽室に着いた。

ん？平沢が震えてる？もしかして緊張してるのか

そこで後ろから声がかかる。

律「あなたが平沢唯さん？」

唯「はあ～びつくりしたあ～。あ、はい。そうです。」

律「はあ～～ ムギ、お茶の準備だ！」

いやあ～、入部希望者が3人も来てくれるなんて「

え・・・3人ってことは・・・俺と明久も入ってるのか？

智也「いや、俺は・・・」

明久「え？僕は・・・」

律「さあ、入った入った！～！」

智也「お～い・・・」

明久「え？え？」

（音楽室）

澪「軽音部へようこそ！」

紬「お待ちしてました～」

智也「はあ

紬「さあ、召し上がって～

目の前には高級そうな紅茶とお菓子が置いてある。
凄い美味しそうなんだが……

唯「わあ～凄くおいしそう

明久「本当だ美味しそう」

完全に本来の目的を忘れてるよこの人。しかも明久まで。
しかも2人とも幸せそうな顔でケーキを頬張っているし…

智也「はあ…」

すると部長らしき人物が…

律「食べないの？」

と聞いてきた

紬「もしかして甘いもの苦手だったかしら…？」

といかにもお嬢様みたいな女子が申し訳なさそうな顔をしていた。
そんな顔されたら食べないわけにもいかず…

智也「いや、ちょっとと考え事してたんだ。

甘いものは好きだし。じゃあいただきます」

と1口ケーキを口の中に入れると。

智也「…つまつ」

思わず声が出てしまった。そこら辺のケーキ屋より遙かに美味しい。
ケーキは結構食べてるのでだがこれはかなり美味しいかった。

律「そうだろ？ムギの用意するケーキは美味しいんだぜー。」

紬「いえ そんな…」

何故か威張る部長らしき女子と、謙遜する『ムギ』と呼ばれる女子。

澪「平沢さんと…えつと…」

黒髪の女子が俺の方を見て困った顔をしていた。

智也「ああ、俺の名前はは中川だ」

明久「僕は吉井だよ」

澪「あつ…つんつ」

俺の名前が分からなかつたんだろうから教えると、
黒髪の女子はどこかホッとしたような顔をした。

澪「平沢さんと中川君に吉井君はどんな音楽やりたいの？..」

改めて黒髪女子が聞いてきた。

唯「えつー…？」

吉井「あつ」

智也「あ～…」

平沢は今まで食べていたケーキから皿を離し驚いた声を出した。
明久も今頃目的を思い出したみたいだ。

智也「とても言いくらいだが。俺達は入部にきたわけじゃない
からな。

それにコイツも実はギター弾けないから退部にきたんだ
律「えええ！…！…うなのか！？」

待つて、あと一人入部しないと廃部になっちゃうんだよ……」

智也「マジで！？」

俺、そんなこと聞いてないぞ。

律「うん、マジで！？」

明久「どうしちゃう智也

智也「やつこつともな……」

律「そんなこと言わずにせめて演奏だけでも聞いてってよー」

智也「平沢いいか？」

唯「うん！」

智也「じゃあ。聴かせてもらひてもいいか？」

律「もちろん！」

そして俺と明久、平沢は演奏を聴いてみた。

翼をくださいのロツクverか。

にしても、なんだらかの感覚は・・・新鮮だな。

演奏 자체는 정직하고あまりうまくないけど, 心に響く演奏だったな。

唯「あんまり、うまくないですね！」

平沢が思つたことをそのまま口にした。

律一ばつさりだー！

明久「言つちやつたよ」

唯一でも、私はこの部に入部します！軽音部に！

智也 - 良いのか?」

唯「皆さんなんだかすうごく楽しそうでした！だから私この部に入部します！！」

律・澪・紬「「「やつた———」」」

智也「まあそれでいいなら俺はいいが…」

「あたしは、あなたがモード用意に済んだら、
ケーキご馳走様でした」

明久「じゃあ僕も」

俺と明久は席を立ち帰ろうとすると

唯「え？トモ君もアキ君も一緒に軽音部入るつよ。
確かまだ部活入っていないんだよね」

智也「まあ、まだ部活は決めてないが……」

明久「うん、僕もだけど……」

そこで部長らしき女子の田がキラリと光る。

律「なら、軽音部に入ろうぜ」

智也「え？」「いや。俺は……」

明久「え？」

唯「そうだよートモ君もアキ君も一緒に入るつよー

律「そうだ！ そうだ！一緒にやろうつよー！」

今なら『副部長』のポジションが空いてるからー。」

そんなポジションは正直いらない

智也「……なんで俺たちを誘うんだ？」

平沢が入部したんだから廃部することは
なくなつたからいいんじゃないのか？」

その疑問をぶつけると…

律「理由は簡単だ！ 人数増えた方が、演奏の幅が広がるからな！」

…あと部費も増えるし……」

おい、今本音が聞こえたぞ

唯「私はトモ君とアキ君と一緒にやりたいなー！」

律「澪とムギも入つて欲しいよな??」

黒髪女子とムギに聞く部長りしき女子。

紬「ええっ もちろん!!」

澪「元々、入部希望者だと思つてたしな断る理由はなによ

あれ?歓迎ムード?

律「ほらほら2人もいいつまつてんだからね~

唯「そりだよ~トモ君~アキ君~」

智也「……」

明久「……」

そうだな。このまま何もせずグダグダするより、一度入つてみるか。
気に入らなかつたらやめればいいだけだしな。
・・・・・・・・それにケーキおいしかつたしな。

智也「わかつた。入部するよ」

明久「僕も入るよ」

律「本当かー?」

智也「ああ、本当だ」

明久「うん、本当だよ」

律・唯「やつたーつ!」「

澪「これで本当に6人目獲得だな!」

紬「はいっ!」

智也「……」

明久「……なんか照れるね//」

俺たちが入部するだけで、こんなに喜ぶ彼女達。
なんつうか…悪い気はしないな…照れくさいけど。

律「そういうえば…えっと…名前なんだっけ?」

智也「ああ、ちゃんとした自己紹介はまだだったな。
俺は中川智也だ。これからよろしく頼む」

明久「僕は吉井明久だよ。よろしくね」

律「智也と明久か。じゃあトモとアキだな。

トモとアキは何か楽器できるのか?」

智也「俺はギターかベースなら出来るやで」

明久「僕はギターなら」

律「マジで…凄いの入ってきたよ！」

唯「す、ーーい、2人とも…弾けるんだ！」

智也「親が昔バンド組んでいてな。一通り教えてもらつたんだ」

明久「僕は母親に教えてもらつたことがあるんだ」

澪「それでも凄いな」

唯「あ…でも私、全然楽器出来ないし…

あつ・マネージャーとかどうかなー…？」

智也「いや…運動部じゃないんだし…マネージャーは…」

紬「そうだー！」

俺達の会話から何やら思い付いたらしい『ムギ』が、こんな提案を俺と平沢にしてきた。

紬「中川君つてギターできるの? やね?」

智也「まあ、ある程度は

紬「なら、中川君が平沢さんにギターを

教えてあげたらよろしこのではないでしょうか?」

律「それはいい案だなムギ」

智也「え?俺が?いや、無理だろ」

律「大丈夫だ。自分を信じる。つてか部長命令」

智也「理不尽な」

明久「智也ならできるよ」

唯「よろしくお願ひします師匠!」

智也「はあ~」

俺は済し崩しに平沢にギターを教える事になった。

軽音部での日々

（後日・教室）

和「へえ、唯って軽音部に入つたんだ」

唯「私、ギター弾くんだよ」

和「え？ 唯、ギター弾けないでしょ？」

唯「うん、弾けないよ。でもねトモ君が教えてくれるんだ」

和「中川君、ギター弾けるの？」

智也「まあたしなむ程度は

和「大変でしようけど頑張つてね

智也「……ああ」

（音楽室・放課後）

唯「うん、おいしい！」

明久「本当においしいね。僕のカロリーが満たされていくよ

明久その言葉にお前の命が危ない気がするんだが・・・・・

智也「本当にっこしいな・・・・・・つて練習ーー
・・・いや、その前に平沢ギターは?」

普通にケーキ食べてる場合じゃなかつた。

唯「へつ?」

律「じゃあ、今週の日曜にギター見に行くか!」

智也「それがいいだろ? それがないと練習もできないしな」

唯「ねえ、トモ君のギター見せてー!」

智也「ああ。これだ」

澪「E S P ホライゾン! ?

智也「ああ

澪「へえー、凄くいいギター持つてるんだなー!」

智也「あ、ああ。秋山・・・近い・・・・

澪「うー、うめんーーーーーーーー

紬「澪ちゃん・・・中川君・・・・

唯「ムギちゃん・・・・?」

律「なあトモ！なんか、弾いてみてくれよー。」

紬「私も中川君のギター聴きたいー！」

明久「僕も聴きたい」

智也「別に良いけど…………あまり期待するなよ」

俺はギターを抱ぎ、1曲演奏する。

紬「中川君すばらしい」

唯「本当に凄いねトモ君」

明久「智也は本当に凄いね」

澪「さすがは、中川…………智也…………だな／＼」

恥ずかしいなら名前で良いの。ってか名前を呼んだだけで顔赤くなるのか？

そりや少し恥ずかしいかもしけないけどそこまで？

ちょっと聞いてみるか…………

律「なに？てか『律』で良いって言つてんじやん

智也「なあ田井中？」

昨日、俺と平沢は改めて自己紹介をし、

その時に田井中が俺の事を『トモ』と呼びだした。

それを聞いた平沢が『トモ君のほうが良い』なんて事言つてたがまあ呼び名なんて今さらどうでも良いが…………もつ平沢であきらめた。大丈夫。俺が慣れれば言いだけの事だ！

で、その折りに平沢と田井中が『名前で呼べ』と言つてきたがさすがに女子の名前を呼び捨てで呼ぶのは少し抵抗がある。だから、今は苗字で呼んでいるのだが・・・・・・

智也「まあ気にしないでくれ。それよりちよつといこか？」

律「結構重要なんだけどな…………」

手招きすると愚痴りながらも俺のそばに来た田井中に秋山に聞えないように小声で話す。

智也「（昨日から思つていたんだが秋山つてもしかすると人見知りとかするタイプか？）

律「（ん？ああ　するよ。それに今なら人見知りだけじゃなく、恥ずかしがり屋、寂しがり屋、怖いものはダメ、負けず嫌いという4点セット付きだ）」

智也「（……なんだよ『今ならお買い得』みたいな言い方は……）」

なるほど、そんな性格してたんじゃ昨日あつたヤツの名前を呼ぶだけで赤面するわけだ。しかも俺男性だし。

チラッと秋山を見ると…

澪「…？」

『何の話をじてゐるんだ』と言わんばかりの表情をじていた。

律「（それに……）」

智也「（ん？）」

律「（トモが不機嫌そな顔してゐるからじやないのか？）」

若槻「ヤケながらそんな事を言つてくる。

智也「（昨日も言つたがこの田はは生まれつきだ！
傷は小学校の時に出来たんだ！

俺だつて……俺だつて……」こんな顔……（

律「ちよつー？ひとまず落ち着けトモ」

智也「これが落ち着いてられるか！？」

律「もし生まれつきだとしてもそんな顔してたら

相手に誤解されるよな？という事で笑つてみましょー…あ
笑うんだ！」

そう言つて俺の頬に手を伸ばし無理矢理笑わせようといつ張る。

グニッ

智也「（口…何する

澪「律ッ？」

律「笑顔の練習だよん」

んなことを笑顔で言つてくる田井中。

そして急に俺の類を引っ張り出した田井中に困惑の声をあげる秋山。

とつあえずやられっぱなしへ性に合わなこので反撃に出る事に。

グイッ

智也「田井中!少しは女らしさへしたらいだつだ……」の口調とかな

そつ言い田井中の類を引っ張る俺。

澪「中川君ッ?」

律「いやーおーうーーのシリ田ーー」

智也「カチューシャ

律「ヤンキー

智也「俺はヤンキーじゃねえー!」

お互いの類を引っ張り合ってながら口論つする俺達。

…と

澪「…クスツ あははー!」

笑い声が聞えてきた。

澪「あはははっー。」

智也「ん？」

律「…澪？」

澪「い、ゴメン…なんだか2人がおかしくって…あははっー。」

目に涙を浮かべながら俺達を見て笑う秋山。：ツボに入ったようだ。

智也（…笑うと可愛いな）

初めて秋山の笑顔を見た。

律「全くトモのせいで澪に笑われたじゃないか～」

同じく笑いながらそんな事を言つ田井中。

智也（…いや 先に仕掛けたのお前だろ）

そう思つたが口に出さなかつた。

せつから秋山が笑つてんだそれはヤボだな。

そして今度の日曜日、皆で平沢のギターを買いに行く事になつた。

軽音部での買い物

（待ち合わせの商店街）

休日の街を一人で待つている。

今日は平沢のギターを購入するために、
軽音部員と待ち合わせしているためである。

まだ時間があるので音楽を聴きながら待つことにした。

数十分待つこと

全員揃つたので楽器店に向かうため俺達は商店街を歩いていた。

ちなみに女性陣は横一列で歩いており、
俺と明久はその列後ろで歩いている。

何故かつて？そりや恥ずかしいからだよ。

女子4人に対し男2人だぜ！

しかも中学時代女子と買い物なんて行った事ないから恥ずかしいし。

紹「お金は大丈夫だつた？」

唯「うん。お母さんに無理言つて5万円前借りをせてもうつたんだ」

智也（それだけあれば何とかなるな）

琴吹と平沢の会話が聞えてきたので、俺がそんな事を考えていると…

唯「ちよつと見るだけ」

平沢の声が聞えた。

智也（何だ？）

明久「どうしたんだろう？」

とある洋服店に突入する平沢。

呆れながらもちゃっかり付いて行く田井中。

笑顔で洋服店に足を運ぶ琴吹。

その場に残る秋山。

こんな状況だった。

智也「なあ 秋山？」

澪「何… 中川？」

智也「帰つていい？」

澪「ゴメンそれだけは勘弁して……」

秋山は涙目になりながら懇願していく

智也「冗談だ」

とつあえず突っ立つてゐ訳にもいかないので…

智也「とつあえずアイツ等の事頼んでいいか?」

俺はそここの本屋にいるから

澪「え? 行かないの?」

智也「いや、だつて、あそこは女性の服を扱う店だろ。」

男子の俺らはさすがに入りにくいし……だから、頼む秋山。

そこは察して欲しい

澪「そうだな。わかつた すぐに連れてくるから」

智也「……了解

そう返事し、秋山は平沢達の後を追い、俺と明久は…本屋に向かつた。

おそらく秋山の性格上すぐつて言ひのな無理だひしきな。

澪「お待たせ…」

本屋で新刊のチェックをし、音楽雑誌と漫画を立ち読みしていたら…

.....

申し訳なさそうな顔をした秋山がやつて来た。

智也「ああ、大丈夫。ひとまずお疲れさま」

パタンと雑誌を閉じながら答える。

智也「まあ
行こうぜ」

漆「つる」

明久「お疲れさま秋山さん」

今度こそ楽器店へ

が、その後も平沢と田井中、便乗する琴吹に振り回され、
雑貨店、デパ地下、ゲーセン等々……最終的には秋山も楽しんでいた。
まあ俺も明久も楽しんでいたナゾ。

今度は休憩のため、喫茶店に入店する俺達。

唯「はあ～疲れた～」

律「へへ～買ひちつた～」

紬「楽しかったですね～」

口々に言ひ面々。更に…

唯「次ド」「行こつか～？」

明久「ドコがいいかな？」

平沢が目的地は一つしかないのにそんなこと言ひ。

なので…

智也・澪「「樂器だ 樂器」」

と、俺と秋山の声が重なる。それを聞いた平沢は…

唯「あつせつか 何か忘れてると思ったら…ギターだ

智也「おい、お前ら寄り道しそぎなんだ」

流石にシシ「おめざるを得ない。

律「でも、智也だつて楽しんでたじやないか。

その手荷物見ても説得力ないぞ」

智也「うう……」

俺の隣にはゲーセンでとつたぬいぐるみなどが入った袋が置かれてあつた。

いや、だつてゲーセン行つたんだ。

ブツどらないと……しかも今日は運よく結構取れだし。

・ 紛余曲折ありながらもよつやく本来の目的地に向かう」と二

（10GIA）

澪「女の子ならネックが細いやつがいいぞ」

唯「あ、このギターかわいい」

智也（聞いてないな……）

明久「それ、25万するよ」

唯「やすがに手が出せないや……」

智也「向ひに安いやつがあるが。

ストラトとかテレキャス系とか色々・・・」

智也（動く気配なしだな・・・）

紺 ー そのギターが欲しいの？

「うん……」

澪「私も、あのベースが欲しかった時こんな感じだったな。」

。 。 。 。 。 。 。 。

回憶からすると、何か秋山のは違う気がするような

律「私も、あのドラマ買つために

卷之三

零「五經記」

やつぱりな。

紬「あの~、値切るつて?」

律「欲しい物を手に入れるためにマケてもらうことさ！」

モードはドヤ顔するところなのか？

「何か、憧れます」

智也「いや、憧れるか？」

律「じゃあ、みんなでバイトするかー！」

澪「バイトってどんなのするんだる・・・・・・・・」

～音楽室～

律「うん、じゃ、ティッシュ配りとか?」「

澪「・・・・・・・・無理そつ・・・・。」「

明久「ファーストフードとかは?」

澪「それも、無理そづ・・・・。」

智也「じゃあ、これならどうだ?」「

唯「交通量調査のバイト?」

智也「これなら日給もそこそこ良いし、短期バイトだから部活にも影響しないだらうしな

澪「うん、これなら大丈夫!」

「つけて、何のバイトするかは決まった。

軽音部での買い物（後書き）

少し皆さんにお聞きしたいのですが
バカテスキキャラとけいおんキャラのカップリングですが、
どのカップリングがいいなとか希望はありますか？
これはまだカップリングを決めていないので
その参考にしたいと思っています。

また、その時ハーレムありにすべきかも悩んでいます。
その件も含めて感想をいただけると嬉しいです。

アルバイト

（教室）

和「バイト？」

唯「うんつーギター買つためにー軽音部のみんなも協力してくれるんだ」

和「え！？みんなを巻き込んでー？」

唯「うんつ」

和「じゃあ…中川君も？」

唯「？…やつだよ、トモ君も」

和「そなんだ…意外…」

智也「ん？どうしたんだ真鍋？俺のこと見て？何か俺の顔についてるのか？」

和「いや…中川君が唯のためにバイトするって少し意外だなって思つて」

智也「そつか？」

和「中川君つてなんだかめんどくさがりな感じがしたから…」

智也「失礼だな……」

そりや確かに少しばかりはそこまで言われる筋合いはないで。

智也「まあ、今は軽音部のメンバーだからな。

メンバーが困ってるんだから手伝わないとな。

それに俺は平沢にギター教えないといけないんだから
頼まれたことはちゃんとやらないとな」

和「クスツ、そつなんだ。じゃあいつか私も何か頼もうかしら」

智也「……俺に出来る事なら」

唯「トモ君は優しいからね」

陽「そつなんだよ智也は優しいからね~」

と、平沢と……

智也「……誰だっけお前?」

陽「お前の親友の春原陽……親友の名前忘れるなよ……」

智也「え? 親友? 誰ソレ?」

陽「……」

「ん? 黙った?」

いつもなら騒音問題レベルの声で反論していくのに……

陽一 「ふう？」

と息を吐き『やれやれ』と手を上げ首を左右に動かす陽一。
… 何だマイシッ？

陽一 「こいつめうひといろが素直じゃないんだよな？」

良いかい？唯ちゃん、和ちゃん。

マイシはあんな事言つてるけど、照れくさいだけなんだよ」

智也 「……」

唯 「うひ」と

和「若干そんな気はするわね」

陽一 「でしょ？ つまり智也は…」

セイヒで俺を指差して

陽一 「シンテ」

智也「うひせうひ」セイヒ

シユダダダダダダダダダッダダダダダつー！

176 ハート

俺は瞬時に陽一の懷に入り込み、C—NNADの智代並に蹴りを叩き込む。

陽一 「ウゴアーー。」

智也「誰が何だつて？もう一度言ひてみる」

口を押え悶え苦しむアホにすゞみを利かせる。
するとアホは…

陽一「…ツ、シンデレ…」

シユダダダダダダダダッダダダダダッ！！

俺は再びを陽一に向けて蹴りを繰り出し黙らせた。

陽一「ウベニ…！」

智也「黙つたか」

唯「陽一君が死んじやつた？…！」

和「多分大丈夫よ」

慌てる平沢とやはりどこか冷静な真鍋。
ちなみに真鍋の言つ通りだな。

コイツはG並みの生命力を誇るからな。

智也「あつ、そうだ。俺このバカに用事があつたんだ」

唯「なんの用事？」

智也「今度のバイト」いつも手伝わせようと思つてな。

まあコイツならバイトの田舎町呼び出しても大丈夫か

（バイト当日・とある道路前）

週末の休日。

集合場所に集つた俺は

スタッフから預かっていたカウンターを皆に配る。

智也「じゃあ4人は2人ずつのペアで

1時間」とに交代しながらやつてくれ

澪「え？ 中川と吉井はどうするんだ？」

智也「俺と明久は別の場所でやるから。

それにスケット呼んでるから大丈夫だ」

唯「それって陽一君のこと

智也「そうだ。じゃあしつかりやれよ。

秋山大変だらうけど頑張つてな。何かあれば俺に連絡していく

れ

澪「ああ、わかった」

俺はこの場所を4人に任せ、別の場所へと向かつ。

陽一「ねえ？ なんで僕がここにいるわけ？」

智也「そんなの簡単だ。手伝わせるためだ」

明久「当たり前の事聞かないでよ」

陽一「僕、一言もやるなんて言つてないよね」

智也「大丈夫。お前の意見なんて聞く耳無いから」

陽一「鬼！悪魔！！」

智也「……上手くやつたら部活のメンバーに
お前のこと紹介しないわけでもないが」

陽一「僕達親友だろ！手伝つに決まってるじゃないか！」

本当に調子いいな。

1日目は陽一をからかいながら終了した。

2日目は陽一^{バカ}が途中で逃亡しようとしたが、
『男が約束破ると女子にモテないぞ』と冗談交じりでいふと、すぐ
に戻ってきた。

3日目は琴吹が急用という事でこれなくなつたので、
ここを明久と陽一に任せ女子のスケットに向かつた。

そして、

まだ足りないな。

田給80000×3×7=合計168000円

智也「さすがに疲れた」

紬「昨日は本当にすみません。家の用事でそつしても抜けられなくて」

智也「いや、家の用事なら仕方なこと。でも、まだ足りないな」

明久「どうする?」

澪「あと何回かバイトするか・・・」

唯「あの・・・」

智也「ん?..どうした平沢?」

澪「やっぱ、これはみんな自分のために使つて!」

智也「いいのか?」

唯「うん・・・」

明久「けど、それじゃ欲しいギター買えないよ?」

智也「じゃあ陽一の分だけ使つとするんだ」

陽一「なに?..」

唯「早く、皆と練習したいから・・・。

だから、もう一度楽器店に付き合つてくれる?」

いつて、軽音部+によるバイトでギター購入作戦終了

～10GIA～

智也「ムスタングとかどうだ?一応、初心者向けのやつだぞ。って。
・・・・・」

結局、あのレスポールに行くのか。
よつぽど氣になるんだな。

唯「あつ… Hへへ…」

俺達の視線に気付き、曖昧に笑みを浮かべる。

澪「よつぽど氣になるんだな」

律「コツシャー…やっぱまたバイトを…」

智也「だな。今度はよつ金が良いところを探すか」

明久「そうだね。今度は何する?」

紬「あつ… ちよつと待つて?」

智也「ん?」

秋山の言葉に田井中が再びバイトをするかと意気込んで

俺がバイト先を探そうとしよう時

琴吹が何かを思い付いた様子で店員の所に歩いて行つた。

店員と接触し話し出す琴吹。

澪「…何やつてるんだ？」

智也「さあ……あれ?なんだか店員が慌てだしたぞ?」

澪「何があつたんだ？」

智也「……わからん」

秋山と会話をしていると店員と話していた琴吹が戻ってきた。

紹一そのギタリ5万円で売ってくれる」と

「「「」」」

律一覧! ? メシテ! ?

唯一何!? 何やったの!?

智也·濶

琴吹の口から突如告げられた『5万円価格宣言』に

驚愕の声をあげる田井中と平沢。

そして絶句状態の俺と秋山と明久。

だつてこれ25万するんだぞ…………それを5万つて

紺「！」のお店、実はうちの系列のお店で

智也「……マジかよ…」

唯「そ、 うなんだ… ムギちゃん、 ありがとう…

残りはちゃんと返すから…」

何者なんだ琴吹って？

まさか本当に令嬢なのか…………まさか。

平沢は感激の表情でギターの前に座り込む。

律「よかつたな？唯

唯「うんっ！」

智也「これで楽器が揃つたな

紺「やうですね~」

律「よしつー唯…家に帰つたらしつかり練習すんなよ…」

唯「まかせといて…うちはやん隊長…」

互ごとにビシッと敬礼する田井中と平沢。

こつして、 平沢は何とか念願のレスポールが手に入ったとさ。

めでたし、めでたし

平沢家・sides

遂に、あのギターが手に入つたんだ！
これからは、いっぱい練習しなきやね！――

唯「ギュイイイン！！！」

憂「お姉ちゃん、うるさい……」「

唯「あ、」のん憂・・・。つこ、興奮したりやつて・・・。「

だつて、凄く欲しかつたギターが手に入つたんだよ！
名前は、何ていうんだつけ？

「田も早くアモリ追いつかなければー、色んなこと教えてもらわないとねー！」

後日・音楽室

『おおおおおお～～～！～～～』

智也「ギター持つとそれっぽいな」

律「似合つてゐるぞ、唯！」

「えへへ……ねえ、ライブみたいな音出すこなじつあるんだつけ?」

智也「アンプに繋ぐんだ」

平沢は、レスポールをアンプに繋いで弦を適当に弾いた。

ギュイイイン！！！

それは、軽音部というなのライブの始まりの音に聞こえた。

「……や」とスター二だな。私達の軽音部

智也一ああ、そこへたな。

明夕・元張らなしとね

卷之二

智也「今ままじゃ無理だろ」

律一おい!

備ひがケタケタ喋りでいると
平沢か・・・

唯「アンプで音を出すのはもう少し先だね・・・。」

智也「ば、馬鹿、ボリューム下げるーーー！」

俺は、とつさに耳を塞いだが平沢は至近距離で直に聴いたのでグロッキーだ。

澪「アンプから抜く前に、ボリューム下げないとしつなつちやうん
だよ～・・・」

唯「それを先に言つて・・・・・・・・」

智也「・・・あつぶねエー」

相変わらずのグダグダさ・・・。

けど、ようやくスタートなんだよな・・・俺らのバンド。

アルバイト（後書き）

まだまだカッティング案募集中です。

色々案をいただけると嬉しい限りです。

もちろん智也と明久だけではなく
秀吉や康太でもかまいません！

これからも応援よろしくお願いします。

（放課後）

和「唯」

唯「あつ 和ちやん」

和「一緒に帰る？」

唯「ゴメン？ 部活に行かなきゃいけないんだー」

和「そりなんだ…それじゃあ仕方ないね。
ちゃんと部活頑張っているのね」

唯「今日はムギちゃんが美味しいお菓子持ってきてくれるんだ～」

和「え？？」

智也「…………田的違つだら」

唯「あー 田中君ー！」

智也「じゃあ部活行くぞ」

唯「うーーーじゃあ和ちやんまたね

智也「じゃあな」

和「うん またね唯、智也」

真鍋に別れを告げ、部活に行くために教室を出る。
もちろん向かうは軽音部室。

ガチャ

唯「いんこひは～」

智也「ちわっす」

挨拶をして音楽室に入る。

中には俺達以外の4人が既にいた。

律「よつつー」

澪「いんこちは」

紬「いらつしゃい」

明久「いらつしゃい」

と4人から挨拶が返つてくる。

紬「唯ちゃん、智也君。紅茶は熱いのと冷たいの、どっちが良い?」

と琴吹が聞いてきた。

唯「私、熱いの!」

智也「俺は冷たいので」

俺と平沢は琴吹の質問に答え席に着く。
席には田井中と秋山、明久が座つており、
3人の前にはティーカップが置いてあった。

つてか俺今普通に答えたけど

智也「なあ 秋山」

澪「えつ 何?」

秋山は話がフラれるとは思わなかつたんだろう。
少し驚いていた。

智也「ここの軽音部だよな?」

澪「あーっ、うん……そつなんだけど……」

俺の言いたい事がわかつたんだろう、苦笑いを浮かべ肯定する。

智也「なんでお茶が出てくるんだ?」

明久「いいじゃん別に。僕としてはカロリーが取れるだけで幸せだよ」

智也「明久はまずはゲームとかの出費を抑えろよ」

明久「…………今月は誘惑が多くて」

智也「今月もだろ…………」

・・・・・・・・・

唯「ねえねえ 何で澪ちゃんはギターじゃなくてベースをやるのと思ったの？」

席に着き澪吹が淹れる紅茶を待つてると平沢が秋山に質問をする。

澪「だつてギターは……は、恥ずかしい……」

智也「恥ずかしい？」

澪「ギターってバンドの中心って感じで、

先頭に立つて演奏しなきゃいけないし、観客の目も自然と集まるだろ？」

……自分がその立場になるって考えただけで……

ボフンツ！

唯「澪ちゃん……」

頭から煙を出し、倒れる秋山。

智也「おい！大丈夫か秋山！？」

律「それより言つた通りだろ？」

智也「何が？」

律「これが、澪の持つスキルの一つ『恥ずかしがり屋』だ！」
いや、確かに前にも言つてたが何故にドヤ顔なんだ？

にじても・・・・・

智也「纖細過ぎやしないか？想像しただけで、アレって……」

律「そなんだよな。少しでも直つてくれるといいんだけどな～～うするかな～。

いつそトモに任せてみるか（ボソッ）

田井中は秋山の纖細さが心配らしい。

…意外と友達想いなところあるんだな……
最後は何かつぶやいていたが……

紬「お待たせ～ 唯ちゃん～ 智也君、お茶が入りましたよ～」

俺と平沢の前に紅茶が置かれる。

すると平沢は今度は琴吹に……

唯「ムギちゃんはキーボードまことよね。キーボード歴長いの？」

紬「私、4歳の頃からピアノを習つてたの

コンクールで賞をもらつたこともあるのよ」

唯「へつー？ へえーす！」こねえ！

確かにそれは凄いな。

コンクールで賞をとるくらいの実力を持つてるなんて……

唯「アキ君はキーボードいつから習つてるの？」

今度は明久に質問してきた。

明久「僕は小学校の時かな。母にすすめられてね。

中学のときまで少しあつた程度だから、琴吹さんと比べると全然だよ」

唯「それでも少しはできるんだよね。凄いよ

明久「そうかな」

紺「わあ　いただきましょ！」

気がつけば田の前に、ケーキやらクッキーが並べられていた。

…だからこいつ軽音部だよな？

てか良いのかよ、学校でこんなことして…

唯「疑問に思つてたんだけど…」

平沢、やつとお前も気付いたか…

そりゃそうだ。田の前にこんだけのもんが並んだらいくらなんでも
気付くよな…

唯「ここの部屋つけてやけに物がそろつてるよね～。ティーカップとか

明久「あ、そういうえばそうだね」

智也「そつちかよッ…！…って明久お前もか！？」

唯「えつ…トモ君がひつたの…？」

明久「い、いきなり大きな声出さないでよ。ビックリするじゃない
か」

智也「いや…わるい…やはり俺の考えは甘かったんだと
再び実感してしまつて声をあげてしまった…」

こいつには多分俺の勘違いなんだ。
これが正しいんだ。そうに違ひない…ってかそつ思おつ…

明久「で、こここの物つてどうしたの？」

紬「ああ、それは私の家から持つてきたの」

智也「自前なのかー？」

その後俺は彼女達の会話を紅茶を飲みながら受け流していた…

テスト前

～下校中～

部活も終わって下校中。

今田は珍しく誰と一緒に帰っている。

唯「確かにうだつたよね」

平沢は先ほどまで俺が教えていたギターのコードの押さえ方を練習していた。

唯「解です隊長！」

智也「誰が隊長だ」

そこへ

和「唯一中川君！」

唯「あー和ちゃん！」

平沢は真鍋に向かって手を振る

和「……何それ？新しい挨拶？」

平沢の手は先ほど教えていた

コードの押さえ方のままの状態だった。

唯「今日はねトモ君にね。

ギターのコードについて教えてもらつたんだ～」

和「そうなの」

唯「うん。それで練習中に何度も指がつちやつたんだ～」

和「へー頑張ってるのね」

唯「それでトモ君に指のストレッチの方法を教えてもらつたんだ～」

そこで平沢は俺が教えたストレッチをやってみせる。

和「あまり無理しないでね唯

智也「なあ～真鍋は平沢の幼馴染なんだよな？」

和「え? どうよ

智也「やっぱり勉強とかも教えたのか？」

和「そうね。泣き付いてくる事が多かったからね

智也「放課後部活でアイツに教えているんだが……疲れる」

和「あ～」

真鍋は俺の言葉に納得するよつて答える

智也「ぶつちやけ真鍋が凄いと思つよ。

よく今まで教えてこれたな」

和「そうでもないわよ。それに中川君だつて吉井君や春原君に勉強教えてきたんぢゃないの？」

智也「そつだが、あいつらには手を出していたからな。

それにはじきもつもない時はメモだけ渡して勝手にさせてたし。

さすがに平沢にはそんな事できないしな……」

和「私から言へることは根氣強くやる」とね

智也「それしかないよな~」

唯「ん?どうしたの2人とも」

智也「なんでもないわ唯」

和「なんでもないわ唯」

唯「そつ?そつ?といえば和ちゃん今日は帰るの遅いんだね」

和「うん、図書室で中間テストの勉強してたから」

智也「そつ?といえば、中間テスト近かつたよな~。

メンドクサイが勉強しないわけにもいかないしな……まあやるなら1番になつてみたいしな。

そういうえば確かに文翔学園の試験は特殊で試験時間内なら何問でも解けるんだよな？」

和「そいうじいわね。

でも今度の試験は上限100点の試験らしいわよ

智也「そりなのかな？なんだ少し期待してたのに」

和「中川君って成績良い方なの？」

智也「まあそこそこだな。中学では上位に名前があつた程度だ。
真鍋はどうなんだ？」

和「私もアナタと同じ感じよ」

智也「なら、今度のテストの総合点数で勝負しようぜ。
負けたほうが雇おう」りで

和「まいいわよ。受けて立つわ」

智也「おー乗りいになーつきつ断られると思つたんだが」

和「またまにはこういつのもいとかなつて思つてね

智也「なら、決まりだな」

和「ええ」

唯「そつかーテストかーつて、ええー？テストおおー？」

智也「驚きすぎだろ……ってか反応も遅いな」

唯「え？ もうテストの時期なの？」

和「いえ、まだもう少しはあるわね」

唯「あ、そつなんだ～私ビックリしちゃったよ～」

智也「まあまだ日にはあるから今から勉強しどけば大丈夫だろ」

唯「そつかあ…もう中間テストなのかあ…
せっかくギター練習しようとしてたのに」

和「…………」

智也「その心意気はいいな」

和「…あんた今まで試験勉強なんてしたことなかつたじゃない」

唯「そつかーなら大丈夫だネ」

和「いや…大丈夫じゃないけど…」

智也「…………心配だな」

中間試験

（試験日当日）

カリカリ…

シャーペンが踊る音を奏でる。

5月下旬。

高校生になり初めての中間テスト真っ最中。

智也（出そうなところをかなり絞つて勉強したからな。
おっ！この問題もやったな）

カリカリカリカリ・・・。

まあ、これならなんとか大丈夫か？

・・・・・・・・・・

陽一・唯「……」「

～テスト終了後～

俺と真鍋の前には真っ白になつた平沢と陽一の姿があつた。

和「テスト…ダメだったの？」

そんな2人を見て真鍋が問い合わせる。

唯「…うん

陽一「…さつぱりです」

智也「平沢はともかくお前は予想通りだな」

唯・陽一「……」「

その一言を答え氣力をなくしてしまつたかの様に再び黙り込む。陽一もいつものように反論せず黙り込んでいた。

和「中川君は？ テストどうだったの？」

智也「数学と英語は自信あるな。

ただ国語だが古典が出てたから少しあやばいかもしないな。
そういう真鍋はどうなんだ？」

和「私は、まあまあかしらね」

そつまう奴ほど良い点取るだよな…

智也「まあ後はテストが帰つてきてからのお楽しみだな」

和「そうね。どちらが勝つてるかしら？」

智也「それもお楽しみだな」

～テスト返却日～

教師から名前を呼ばれ次々とテストが返つてくる。

そして次は『す』の順番が来る。

教師「春原」

陽一「ハヒイ！」

智也（声裏返つてんぞ）

陽一は緊張してなのか手と足が一緒にでるという動作で教師の元に向かう。

そしてテストを貰い…

春原「……」

真っ白になつた。

何点だつたんだ？まさか赤点なのか？

ゆっくりした足取りで席に戻り席に倒れ伏した。

教師「中川」

いつの間にかに俺の番までやつてきていたので俺はテストを取りに行く。

結果は

国語66点 数学100点 英語100点
社会83点 理科86点

智也（数学と英語はよくできたな。でも国語がよくないな～）

俺がテストを見て考えていると

教師「平沢」

平沢「ハ、ハイツ！」

いつの間にか平沢が呼ばれていた。

陽一と同じような動作でテストを貰いにいく平沢。

平沢「……」

テストを返してもらひつた瞬間真っ白に。

教師「真鍋」

和「はい」

キビキビとした動作で教師の元に行きテストを貰い、満足げな表情で席に戻る。

智也（あの表情じゃ点数良かつたんだな）

・・・・・

智也「で真鍋、どうだった点数は？俺は総合で435点だ」

和「私は476点よ。私の勝ちね」

智也「うげっ！476点…9割いってんじゃないか！？」

クリソ…凄いな真鍋は。俺は国語で足引っ張ったな

和「国語はいくつだったの？」

智也「66点。数学と英語でせっかく満点取ったのに国語が悪すぎた。古典の問題さえ出てなければな

和「え？満点2つも取ったの？凄いわね」

智也「まあでも負けは負けだ。今度メシおごるわ」

和「ええ、お願ひね

智也「で、そこの2人はどうだったんだ？」

和「聞かなくても分かるわね…」

智也「まあな……」

俺と真鍋の前には真っ白になつた平沢と陽一の姿があつたのだった。

中間試験（後書き）

まだまだカツプリング案募集中です。

これからも応援よろしくお願いします。

試験後の部活

（部室）

俺は魂の抜けかかった平沢をつれて部室に来ていた。
部室にはもう皆揃っていてお茶を飲んでいた。

俺も平沢も琴吹にお茶をお願いして席に着いた。

律「やっとテストから解放された～」

明久「疲れた～」

紺「高校になつて急に難しくなつて、大変だったわ

智也「そうだな……そして、もっと大変そうなやつが……」

そつ言つて俺はドンヨリしたオーラを出す平沢を指差す。

澪「そんなにテスト悪かったのか？」

秋山がおそれおそれ平沢に尋ねる。

唯「ふつふつふつふつ…

智也「…………ついに壊れてしまったか」

物悲しい笑みを浮かべ真夜中なら秋山が卒倒しそうな声を漏らす平
沢。

唯「クラスで2人…追試だそうです……しかも全科目……」

澪・律・紬「「「うわあ……」」

答案用紙を見せやはり物悲しそうな笑みで伝える。

ちなみに赤点（追試）になるのは30点以下の点数の時です。

律「ん？2人？……という事は……？」

律はそういうと皆が俺のほうを見てくる。

智也「俺じゃねえよ」

明久「だ、だよね」

律「だよな～トモじやないか！じゃあ誰？もつ1人？」

智也「虫以下の人物だ」

律「誰それ！？すげえ気になるーー！」

智也「気にするな。気にしたら負けだ」

明久「なんだ陽一か」

智也「そういう明久や田井中はどうなんだ？」

秋山と琴吹は大丈夫だろうが……」

明久「あ、僕はもちろん追試だよ！」

明久は隠すことなく宣言した。

智也「いや、なに堂々と言つてゐるんだよ」

明久「あははははっ……」

智也「笑い事じゃないだろ」

紺「だ、大丈夫よ！ 今回は勉強の仕方が悪かつただけじゃない？」

澪「そりやう！ ちょっと頑張れば追試なんて余裕だつて！」

智也「そうだな。頑張れば追試なんて余裕だつて」

琴吹と秋山が追試組を励ましてた。

唯・明「勉強は全くしてなかつたけど……」

紺「あはは……」

智也「励ましの言葉返せー！」

俺達の激励を自業自得な理由で返す。

.....

律「何で勉強しなかったの？」

唯「いや……しようと思つたんだけれど……

なんか試験勉強中ってさ勉強以外の事に集中できたりしない？」

律「あ～それはあるな。部屋の掃除はかどつたりな」

明久「うん、あるね」

唯「勉強の息抜きにギターの練習したら抜け出せなくなりやつて
結局全然勉強できなかつたの～」

明久「僕は息抜きにゲームしてたら気づいたら朝だつたんだ」

智也「おい、明久……お前つてヤツは…………」

もう明久の発言にはあきれりしかなかつた。

智也「平沢は…少しば上達したのか？」

平沢「うんっ！おかげでコードいっぱい弾けるようになつたよ！」

『どうだつ！』とも言わん限りの堂々とした表情でVサインをつくり威張る。

智也「威張るところじゃないからな

秋山「その集中力を少しでも勉強に回せば……」

秋山がポソリと呟いた。

明久「田井中さんはどうだったの？」

律「私が」

正直、俺も気になっていたところだ。

律は俺たちにテストを見せる

智也「えっと、国語85点、数学72点、英語70点
社会87点、理科81点、総合395点」

ふう～なんとか田井中には勝つていたか。

唯「ほんなの、つっちゃんのキャラじゃない……」

明久「だね。ちょっとガッカリだよ……」

律「おい、どうこうことだそれー？」

智也「悪い、俺も正直驚いてる。

だつて田井中がこんなに点数が良いなんて」

律「これくらいは余裕だ」

澪「へえ～テスト前日に私に泣きついて来たのはドコの誰だつてけ
？」

律「澪！それは内緒だろ！」

智也「なんだ、やつこいつとか。なら納得だ」

その後、試験が終わったところで雑談等を交わして部活終了となつた。

追試 勉強会？

（後日・音楽室）

俺は部室で琴吹の入れてくれたお茶を飲みながらよつかんを食べていた。

ガチャ

唯「あつー。今日はよつかんだー」

明久「あ、本當だ！ 美味しそう」

職員室に行つていた明久と平沢が部室にやつてきた。

唯「ん、ようかんおいしいー」

平沢と明久は紹にお茶をもらひよつかんを食べている。

智也「そりいえば明久。職員室でなんて言われたんだ？」

明久「追試の人は合格点取るまで部活動禁止だつて」

おー、そつか。

部活動禁止か・・・

皆『ええっ！？！？！？』

澪
—
結構厳しいな

智也 おい、なにお前が来た？

御 が よ な こ こ は 居 る の も う い ん し ゃ

お暮三食へてゐたけだし

時々力口! 挑戦してゐたのにが生

絶てモそれて、て、

二の部自身無くなつ

智也「まあぎりぎり4人いるから大丈夫か」

「ヒヤイナムー」

智也「ならさつさと帰つて勉強しろよ」

紬「それで、追試はいつなんですか？」

唯「ん~とねえ、1週間後」

智也「1週間後か…。」

明久「1週間もあれば、毎日ここに来ても
お菓子食べに来ても大丈夫だよね」

唯「そうだよね~1週間もあるもんね。大丈夫だよ~」

律「…って大丈夫な訳あるか！」

そして、唯は律の首絞めの刑に遭っている。

智也「1週間しかないが正しいんだが？」

明久「うう……僕のカロリーのためだし、
皆と練習したいからね。僕頑張るよ」

唯「私も皆と練習したい!だから頑張る」

智也「じゃあ、精々頑張つてくれ・・・ッ!」

秋山に殴られた。「冗談のつもりで言つたんだが
さすがに、人事すぎたか?」

澪「人事じゃないんだぞ智也!」

智也「冗談だつて!まあ困つた時は言つてくれれば助けてやるよ。

まあまじめにやつてればだが……

でも、平沢は頑張るとか言つときながら
勉強しないタイプの人間だらうな・・・?

「追試まであと二日」

澪「ちゃんど、勉強してるよね・・・唯と明久・・・」

律「だいじょ・・・心配になつてきた・・・・・・・・・・・・」

正直俺も、アイツらがだらけてる姿が田に浮かぶんだが……

するとそこへ

唯「…澪ちゃん助けて?ーーー」

丁度その話の人物である平沢が救済を求めてやつて來た。

澪「えつー? 勉強をしてたんじゃないの…?」

唯「出来なかつたーーー」

澪・律・紬「「「ええつーーー」」

智也「…………やつぱりか…」

律「…よしつ 今晚特訓だ!」

唯「本当に…？」

律「澪に教えてもらえば確実に合格点取れるだ～」

智也「やつぱり成績良いんだな秋山」

澪「いや、そんな…」

俺の発言にポリポリと類をかき、恥ずかしそうに照れる秋山。

律「つまりんだぜ？一晩漬け教えるの…」

澪「うおーーーーー普通に教えるよーーーーー」

紺「ビ〜で誰かさんの勉強をするの〜。」

唯「あひ、ウチで良こよ。」

律「じゃあ唯の家で特訓するか」

今口は面親いなし気兼ねしないで良いから

律「そうだな～そつこえば唯の家行くの初めてだな」

俺は行く気はないから帰つて作曲でもやつてみるかなあ

その意志を伝えてひとつと口を開けいつとした時…

智也「…お『バンツ…』なんだ？」

急に部室のドアが勢いよく開いた。

そこには…

陽一「……」

唯「陽一君？」

切羽詰まつた表情の…陽一が立っていた。

律「えつ？誰だっけ？」

田井中が疑問の声をあげる。

陽一「……た」

澪「た？」

陽一「助けて～！～トモエもんつ～～」

国民的な猫型ロボットの様な名を叫び、
その同居人の眼鏡少年みたいな声を出し、俺に駆け寄ってきた。

とりあえず…

ドゴッ！

陽一「さやあつ～～」

蹴つておぐ。

陽一「なにすんるんだ！！」

智也「おお悪い、ついつい蹴ってしまった」

陽一「そんな理由で蹴んなッ！！」

あと本氣で悪いと思つてんのかッ！？」

智也「全く」

陽一「そこの全力で思えッ！！」

智也「うせは落ち着けよ。平沢以外が驚いてるじゃねーか

律・澪・紺「……」

急に現われて俺に蹴られ、叫びをあげながら俺と話す陽一にポカン
とする3人。

平沢はもう見慣れているので気にしていないが。

といち早く呪縛から解けた田井中が…

律「だから誰だっけ？」

唯「春原陽一君。ホラ、私のギター買ってくれるときに一緒に手伝
つてくれた」

律「ん？あつ！あ～いたな～」

陽一「えつ忘れられていたの？」

智也「記憶に残らないほうが良いだろ。お前は」

陽一「んな冷たい事言つなよ~」

智也「黙れ変態

陽一「誰が変態じゃア!!!」

智也「オマエ」

陽一「違エよツ!!!」

自分の事だと分かつてないアホに指差し親切に教えてやる。

とりあえずアホに目的を聞くか…

智也「で? 何しに来たんだよ?」

陽一「おお、そうだった…助けてくれトモエもん

智也「誰がトモエもんだ」

陽一「ヤバいんだって追試!!!全く勉強できねエんだ!!!」

智也「だらうな。予想してた」

陽一「な、なら……」

智也「一人で頑張れ」

陽一「ヒトハな！！」

「どうやら」マイツも平沢同様、追試の勉強が出来なかつたらしい。
そこで何故か俺に助けを求めてきたみたいだ。

唯「陽一君もなんだね…」

陽一「唯ちゃんもか…」

うんうんと共感する二人。

律「じゃあ陽一が赤点を取つたもう一人？」

田井中が以前平沢が言つていた『追試二人』発言を思い出し俺に尋ねてくる。

智也「ああそうだ」

もつ隠す必要もないで頷く。

陽一「ヘルプ ミー 智也ー！」

智也「しかたねエな…」

鞄から一枚の紙を取り出し、ある3文字を書く。
それを陽一に渡す。

陽一「ナニコレ？」

智也「退学届だ」これに必要事項を記入し、提出した。
そしたらもう勉強に悩む事はなくなる」

陽一「流石だな智也……サンキュー……」

バタンツ

俺手製の退学届を持ち部室から出ていく。

澪「智也……」

智也「すぐ戻つて来る

本気で退学しそうな勢いで部室から出ていった陽一に秋山が心配そうに俺の名を呼ぶ。

バンツ!!

陽一「つて退学するかアツ……」

智也「ほひなっ!」

澪「う、うん……」

見事なノリツッコミを披露し部室に戻つて来るアホ。やつぱハイツをからかうのは楽しいなあ。

その後、平沢達女性陣は平沢家へ、
俺とバカは春原家に向かいそれぞれ勉強を教える事にしようと
したが、

平沢から『一緒に勉強しよう』と誘われたのでバカがそれに賛成し
平沢家で勉強会を開くことになった。

そしてせつからくだから明久も呼ぶことになったが、
明久と一緒に勉強していた秀吉と康太。
そして3人に教えていた雄一も一緒に混ざることになった。

全員で10人こんな大人数大丈夫か？

追試勉強会？

平沢の家は、じく普通の一戸建てだった。

律「へえ、ここが唯の家か。唯の部屋とか散らかつてそうだな」

唯「そんなことないもん」

律「ほんとか？」

唯「ほんとだもん」

雄一「えつと…平沢だつたか？良いのか俺たちまで一緒に…」

雄一の疑問ももつともだ。

俺達の人数は10人もいるんだ。さすがに迷惑だと思つのが正しい

だろう。

唯「大丈夫だよ、雄一君…じゃあ、みんな上がりつて上がりつて。」

ちなみに先に自己紹介を済ませてある。
さすがに初対面の顔があるからな。

皆「「「お邪魔しまーす。」」」

憂「あ、お姉ちやんおかえり。」

奥から平沢とそっくりな子が出てきた。

憂「あれ？お友達？」

唯「うん、そうだよ」

憂い「そうなの。初めまして。妹の憂です。姉がお世話になつてます」

智也「久しづりだね」

憂「あつ智也さん！お久しづりです」

・・・・・

皿「紹介をし終えると今度はスリッパを並べ始めた。

憂「スリッパをどうぞ。」

本当にすごい出来た妹だな。

本当に姉とは正反対の性格に近いんじゃないかな？

軽音部の皆が呆然としている。

唯「ありがとね、憂。ほら、みんなこつこつこつ」

人数が多いためリビングに案内する平沢は俺たちを呼ぶ。

康太「…………できた妹さんだ」

陽一「ウチの妹にも見習つて欲しいよ」

明久「優しそうな妹なんだね。

姉さんもこうだつたら良かつたのに」（ボソッ）……」

秀吉「姉上もこれへりこじやつたり（ボソッ）……」

なにやら明久と秀吉がブツブツ言いながら遠い目をしている。

律「それにしても、姉妹でいつも疊りもんかね」

唯「へ~ど~い~と~?」

律「妹さんに唯のこいとい全部持つていかれたんじやないのか?」

唯「ひど~!」

少し涙目氣味で反論する平沢。
平沢妹がやつてくる。

憂「あの、よかつたら皆さんお茶どうぞ。

買い置きのお菓子で申し訳ないんですけど」

雄一「……ほんとによくできた妹だな」

明久「本当だよ。平沢さんが羨ましいよ」

憂「いえ、そんな大したことじやないですよ。」

謙遜する平沢妹。

お茶がみんなに配られる。

雄一「ところで平沢妹は何年生なんだ？」

憂「中3です」

秀吉「ワシらとは一つ違ひじやのう」

律「でさからこいと、姉より上だな」

憂「そ、そんなことないです。」

お姉ちゃんなんか私よりすっごくいい人なんですね！」

なぜか猛烈に姉をかばう平沢妹。

紺「受験生ですね」

琴吹は勢いにのまれ急な話題転換をする。

憂「はい」

明久「どう受けれるかもう決めてるの？」

憂「うーん・・・できればお姉ちゃんと同じ文月学園に行きたいんですけど、

私の学力で受かるかどうか・・・」

本氣で心配そうな顔をする。

そりいえばお姉ちゃんつ子だからさつき必死にかばつたのか。

智也「大丈夫だつて。」

今、追試受けてる平沢や明久、陽一だつて通つたんだから問題ないつて

律「唯に勉強教えてもらえばいいんじやない?」

憂「え、それは・・・大丈夫です。自分でできるから

さりげなく遠慮する。

律「あははは。断られたぞ。」

智也「だな。何気に結構ぐさつて来るんじやねえか?」

唯「え? 何で、何で?」

憂「で、でもお姉ちゃんはやるときにはやる人ですー。」

とことんかばうな・・・

そして少し妹さんと話をしたあと

俺は平沢や陽一、明久、秀吉、康太の5人に勉強を教えている。

秋山、琴吹と協力して・・・

えつ? 田井中と雄一はつて?

それは田井中が途中で勉強にあきて平沢や明久、陽一をからかつて
いたので、

秋山が怒つたので今は雄一と妹さんと一緒にゲームして遊んでいる。

その途中、真鍋が差し入れのサンドイッチを持ってやってきた。

唯「あ、和ちゃん」

和「えい、唯ちゃんと勉強はがじつにね？」

唯「うん、おかげをまで。」

智也「嘘つけ、勉強はかどつてなかつたから

今日みんなでお前の家に来る」とになつたんだひつが

平沢のセツフに訂正を入れておく。

和「あら中川君いたの？それにしても人数が多いわね」

智也「なんか最初の方にグサツとくる言葉があつたような気がするけど置いといて……」

俺はみんなを真鍋に紹介していく。

皆「「「やねじふ」」」

和「真鍋和です。唯とは家が近所で幼馴染なんだけど

高校では唯と中川君と春原君と同じクラスになりました」

丁寧にあこがつをする真鍋。

唯「和ちゃんとは幼稚園からほとんど一緒になんだよ」

和「不思議な縁よね。

ああ、それよりほら、サンドウイッチ作ってきたわよ

智也「ちょうどおなか減つてたところなんだ。
助かるわ～さすが真鍋だ」

明久「わ～い。カロリーがとれるよ」

和「それにしても唯の部屋、全然変わつてないわね。」

サンドウイッチを出した後、真鍋はぐるりと平沢の部屋を見てつぶやいた。

唯「そういえば和ちゃんが私の部屋に来るのって久しぶりだね。
あ、そうだ。ちょうどいいからアルバムとつてみんなで見ようよ」

智也「平沢、今何のために集まってるかわかってるのか？」

唯「分かつてるよ。大丈夫、サンドウイッチ食べてると間だけだから」

康太「…………気になる」

秀吉「土屋の場合は違う意味のよつた気がするの？」

平沢はそういうなり自分の本棚からアルバムを取り出した。

唯「はい、和ちゃん」

取り出したアルバムを真鍋に渡す。

真鍋は渡されたアルバムを開いて思い出を語り始めた。

和「中学の時私がしばらく熱出して休んでたんだけど、毎日唯がプリントを持ってくれたんだよね」

唯「私風邪ひいたことなくって」

和「でもね、その持つてきてくれたプリントの中に唯のテストが間違つて入つててね、

「確かにその時の点数が10点だったかしら」

智也「性格だけじゃなくて、点数まで変わつてないとはな。

よくそれでうちの学校に通つたな」

和「確かに。でもあの時はすつしく助かつたのよ」

唯「えへへへ」

平沢は、昔のことに対する感謝に少し照れていた。

その後、お喋りを中断し勉強に戻つた。

智也「よし、じゃあ、じいちゃんもみる」

唯「え～と……出来た!」

秀吉「……なんとかできたのじや」

康太「……疲れる」

明久「……僕も」

陽一 「……………出来たつ……！」

澪「これだけ解ければ合格点くらい取れるだろ

琴吹「これで皆追試もバツチリね

和「これなら大丈夫そうね」

唯「ありがと、澪ちゃんにムギちゃん！ 和ちゃん！ ……それに、トモ君も！」

智也「ああ

まあ、大丈夫だろ？ 皆で教えたんだから。何とかなるだろ。

（数日後・音楽室）

あ、今日は追試のテスト返しの日だつたよな。
あいつらは大丈夫だつたんだろうか？

俺は部室で琴吹が入れてくれたお茶を飲みながらそう考えていたら、
部室の扉が開いた。

そこにはこの前勉強を教えた5人の姿があった。

智也「どうだつたんだ結果は？」

明久「僕は大丈夫だつたよ」

秀吉「ワシも大丈夫じゃつたぞ」

康太「…………俺も大丈夫だつた」

陽一「僕も何とか大丈夫だつた」

唯「み、みんな・・・ひや・・・100点取つちゃつた!」

澪&智「極端な子(奴)！」

何故か平沢だけは全科目100点といつ凄すぎる点数を叩き出して
いた。

琴吹「これで、追試は終わつたわね。お疲れ様〜」

唯「ありがと、ムギちゃん」

明久「やつとこれで僕の力口リーが〜」

智也「いやいや目的違うだろ」

琴吹「なら、お茶を入れますね。

木下さん達もいかがですか?」

秀吉「ワシらもよこののかの?」

康太「・・・・・・・・・いいのか?」

智也「いいんじゃね?どうなんだ田井中?」

律「OKだぜー、ムギのお茶は美味しいからな」

智也「だとよ」

秀吉「なうすまぬが邪魔するのじゃ」

康太「…………（「ク」「ク）」

陽一「いただきます！」

智也「お前はない」

陽一「ヒドイ……」

琴吹「大丈夫ですよ春原さん。皆さんの分もありますから」

そして琴吹が皆の前にお茶を置いていく。

そして皆がお茶を飲み美味しいといつ声をあげていく。

智也「そういえば平沢コード覚えたんだり？」

ちょいと、弾いてみるよ。

C A m7 B m7 G7 弾いてみる」

唯「バツチリさあーXでもYでもなんでもいいじゃれー」

ん？ 何だよソレ・・・・・・・・・・。

智也「…………お前もしかして…忘れたとかじや……」

唯「…………その通りです……」

智也「お前はどんな脳してんだよ」

澪「…………智也…………誰の事…………頼んだぞ?」

智也「マジでー?」

「誰」

智也「『へつ?』じゃねーかーまた、振り出しじゃんかよー。
もつ…………疲れました…………」

澪「私も少しばかりから…………」

智也「…………ああ、頼む」

秀吉「智也は大変じやな

康太「…………頑張れ」

結局、今田も練習をせざる活動を終えたのであった。

追試勉強会？（後書き）

久しぶりに和登場です。

どうかなつたかも・・・・・・

皆さんの感想お待ちしています。

追試後

明久と平沢の追試も無事終わり、今日は明久と一緒に帰つていた。

今日は明久の家で食事を食べに行くからだ。
これは追試の勉強で世話になつたお礼らしい。

智也「もう7時か…」

明久「さすがにお腹へつたね」

智也「だな。つてか本当に飯食えるのか?」

明久「昨日収入があつたから大丈夫だよ」

智也「いつもあるようにしろよ……」

明久は生活費のほとんどをゲーム費などに当ててるので、
食生活がひどかつたりする。

最近は水と砂糖と塩と油で過ごしていたらしい。
つてかそんなので生きていらるのはお前だけだぞ。

明久と買い物をしている中で俺は見知った人物を見つけた。

?「あつ」

どうやら向こうも気が付いたらしく俺たちの方にやつてきた。

見知った人物それは平沢だった。

憂「こんばんは。智也さん、明久さん」

妹の方の。

智也「ああこんばんは」

明久「こんばんは平沢さん。この前はお邪魔しちゃったね」

憂「そうですね。あつそれと明久さん。
私のことは名前で良いですよ。それだとお姉ちゃんとかぶつち
やいますから」

明久「あつそうだね。じゃあ憂ちゃんだね」

憂「はいっ」

そう言って笑う平沢妹。

憂「お二人は何してたんですか？」

智也「今日は明久が晩飯を」ちそうしてくれるみたいだから、その
買い物だな」

憂「晩ご飯をですか？」

智也「ああ、この前の勉強のお礼だつてや」

明久「智也には色々世話になつてゐるからね」

憂「そ、うなんですか……」

やつひつてなにやら妹が考え込む。

そして……

憂「あの もし良かつたら家で晩ご飯食べませんか?」

凄い提案をしてきた。

智也「えつ? メシ?」

憂「はいっ 私、今日いつもより多めに食材買っちゃつたん
どうじょうつかと思つてたんです。だから、お一人ともどうです
か?」

首を傾げる平沢妹。

智也「だつて明久どうある?」

明久「どうしようか?」

憂「あ、あの迷惑でしたら良いんです!」

私が勝手に言い出したことですから……」

俺と明久が相談しているのを見て急に慌てだし、
最後にはションボリしだした。

智也（アレ？…）のパートーンは…）

そう思い周囲をグルッと見渡す。

そこには噂好きの主婦や仕事帰りのスース野郎、学生グループ、その他諸々が俺達を見ていた。

更には…

「見てー奥さん！あの人、女の子いじめてない！？」

「！」これは… イケませんね…」

「おいおい、あのにーちゃんたち見てみろよ、あんな可愛い子泣かしてんぞ」

「最低だなアイツ…」

というとんでもない誤解をあたえていた。

更にはハタから見れば俺と明久が平沢妹を泣かしている状況に見えるらしい。

明久「なんかマズくないこの状況？」

明久の意見もごもつともだ。

俺は噂している人たちをギロリと睨む。

「ヒイツ！！」

「ヤベヒー！ツチ見た！！」

「おーイッ！逃げるぞーッ！」

一目散に逃げ出す。

それにより更にじよめきがはじる。

そんなこの状況をなんとかするには…

智也「…わかった。行く…」

明久「じゃあ憂ちゃん。」ちやうになつていいくな？

俺と明久が折れるしかないのだ。

まあ別に嫌いやないわけだし、ただ迷惑じゃないかなと思つただけだしな。

憂「えつ？良いんですか？」

明久「うん…」

ションボリ顔から一変、少し嬉しそうな表情をする。

智也「じゃあ行こうぜ…」

やつぱり早々こ歩き出す。

憂「あつ はいっ！」

明久「あつじや あ僕が荷物ぐらー持つよ」

歩き出した俺に駆け寄つてくる平沢妹。

そして妹さんから荷物を預かりその後に続く明久。

俺達は夕暮れの街を平沢家へ歩きだした。

憂「ただいま」

明久・智也「おじゃまします」

平沢家到着。

唯「おかえり～憂

妹が帰還を知らせると奥から姉がパタパタと参上した。

憂「ただいま、お姉ちゃん

唯「あれっ？トモ君にアキ君？どうしたの？」

妹の横にいる俺と明久に気付き疑問の声をあげる。

憂「偶然会つてね。晩ご飯に招待したの」

唯「おお～そ�だつたんだ～ナイス！憂！」

憂「えつ？ あ、ありがと～」

何故かサムズアップする姉に少し困惑しながらも礼を言つ妹。

何がナイスなんだ？

唯「まあ上がつてよトモ君にアキ君ー。」

憂「どうせ智也と明久さん」

智也「…お邪魔します」

明久「お邪魔します」

「」まで来たからには引き返す事も出来ず平沢家に足を踏み入れる。

憂「それじゃあ、すぐに晩飯の準備するね」

唯「はーいっ」

明久「なら、僕も手伝つよ。これでも料理は得意なんだ」

憂「いいんですか？」

明久「うんー、もちろんだよー。」の前お邪魔したお礼させてね

憂「じゃあお願ひします」

智也「じやあ俺も……」

明久「智也は平沢さんとゆっくりしてなよ。

今日は元々僕が智也にこ馳走する予定だつたんだから

憂「そうですね。智也さんお姉ちゃんと一緒にいてくださいね」

智也「……あ、わかった」

晩メシに招待され何もしないのは気が引けるので手伝おつかと思つたが
やんわり断られた。

唯「ねえねえトモ君ー！」

智也「なんだ？」

唯「コード教えて！」

何故かテンションが高い平沢がそう言つてぐる。
床に座つている平沢を見ると
その横にレスポールと秋山が購入したサルコード（無いので省略）
があつた。

どうやらコードを覚えていたらしく……というかそりゃそうだろ。
この前の追試勉強で覚えたコードを全てテリートしやがったんだからな。

部活以外の時間でも覚えてもらわにゃ俺が報われん。

智也「…分かった とつあえず今まで覚えたコードを弾いてみる」

唯「了解！」

なんで敬礼？

・・・・・・・・・・・・

唯「I」れが『D m』だっけ?」

智也「違つ。そりや『F』だ。

つかそつちの方がムズいのに何でアッサリやつてんだよ……」

唯「あつ　『うだー』

智也「『B』だからなそれ

平沢にコードを教えていると

明久「『飯出来たよ』

明久と妹さんが『飯を運んできた。

唯「おつ　ゴ・ハ・ン～今日は何～?」

憂「ハンバーグだよ」

唯「ハンバーグ! やつたネ!」

智也「おおこれは美味しそうだ」

ギターレッスンを中断し晩メシを食べる」と

憂「でも本当に明久さん料理お上手ですね」

明久「えつ？ そうかな？ 小さい頃からやつてたからね」

智也「明久は家事については凄いよな。 家事以外はアレだけ……」

憂「でも、男の人でここまで料理が出来るなんて驚きですよ」

唯「それにおいしいよ～憂！ アキ君！」

明久「ありがとう平沢さん」

憂「ありがとうお姉ちゃん。 あつ ほっぺたにソースついてるよ～」

唯「えつ ドン！」

憂「動かないで拭いてあげるから」

唯「んつ」

憂「はい、もう動いていいよ

唯「ありがとう～憂」

憂「どういたしまして」

智也「……」

唯「あれ? どうしたのトモ君? 食べないの?
食べないなら私が食べちゃうぞ?」

憂「ダメだよお姉ちゃん。それは智也さんの分なんだから」

唯「分かってるよ~冗談 冗談」

憂「もひ～お姉ちゃんつたら」

そう言って互いを見て笑い合つ姉妹。

本当に仲のいい姉妹だな。
そしてまた明久がブツブツ言いながら遠い目をしていた。

唯「それじゃあ、また明日、学校でねトモ君、アキ君」

憂「またいらしてくださいね智也さん、明久さん」

智也「ああ」

明久「うん!」

晩メシの後、平沢姉妹と談笑し、
明久と妹さんが後片付けしている間に、

もつ少しギター練習をしておいたまする事に。

明久はその時に妹さんとメールアド交換をしたらしい。
そして平沢姉妹の事を名前で呼ぶようになった。

平沢が妹さんは名前なのに自分が苗字だったのが嫌だつたらしい。

合宿？

～ある7月の放課後～

陽一「おっそうじ～おそうじ～たのしいなあ～……って楽しくないわっ！！」

智也「やかましい黙れ！！お前の顔面で床でも拭いてひー！」

陽一「そんなことするかア～～！」

本日太陽が照りつける7月中旬。

俺と陽一は放課後に2人だけで空き教室の掃除中だった。

理由は簡単、今日は週に1度の掃除当番の日。

そしてこの場所が俺達の班の掃除区域だからだ。

だが…俺達2人しかいない。

通常1班4人体制なのだが都合悪く、2人病欠なのだ。

智也「はあ～～」

ため息だつて出たくなる。

何が悲しくてこのバカと2人で掃除なんてしないといけないんだ。

智也
...サボるが...

陽一「なあ智也」

智也「なんだあ？」

陽一「正直、ダルくね？ ついつかサボらうね？」

どうやら陽一も同じ事を考えていたらしく

智也「……そうだなサボるか」

陽一「だな。こんな空き教室掃除してもしなくても同じだよな。」

よしつ 行こうぜ！」

智也「……ああ」

珍しく意見が一致したので実行に移そうとした時…

山中「中川君、春原君、ちゃんと掃除やつてる？」

教室のドアから我が校の音楽教師、山中教諭が顔を覗かせた。

陽一「あれ？ 先生何でここにいるんすか？」

智也「……」

山中「あなた達の担任の先生がね

『アイシラは真面目にやつてないと思つので、様子見て来て

くれませんか?』

つて言われたからよ。私も「シチに用事があつたからね、そ
のついでこ」

陽一「べつ…」

智也「……信頼ねえな俺達」

つてか人を派遣しないで自分で確認しに来いよ。

山中「それで眞面目にやつしてたの?」

『今からサボるとしてた』なんて事は言えず…

智也・陽一「もうちうんですよ」

そう答えるしかないのだ…

山中「そつ。それじゃキチソと最後までやつてね。私も手伝つから

陽一「え、つ!? 先生もやるの?」

山中「ええ あなた達一人だけじゃ 時間がかかりそつだから
…何か不都合もあるの?」

智也「いや、そんなのないですよ!」

先生が手伝ってくれるとは思つてなかつたからつい、
なあ 陽一?』

陽一「そうですよー先生が手伝ってくれるのならたら百人力だぜーー!」

山中「それじゃあ早く終わらせておこう。中三番は部活があるんだから更衣室ね」

智也・陽一「はあ～～」

結局、逃げ出す事も叶わず俺達は掃除をするめになつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

紬「智也君」

智也「ん?」

掃除終了後、陽一と別れ部活のために音楽準備室を田指し歩いていると、後ろから琴吹に声を掛けられた。

紬「智也君も今から部室に行くの?」

智也「ああ。琴吹もか?」

紬「そうなのよ。今日掃除当番で遅れちゃって、智也君は?」

智也「俺も同じ理由だ」

紬「そ、うなんだ～」

琴吹と本当にたわいもない話をしていると気が付けば部室の日の前に来ていた。

智也「お先にどうぞ」

紬「ありがとう～」

今は必要がなさそうなレディーファーストを發揮し部室に入る。

ガラッ

紬「「めんなれこ。遅れちゃつて～」

智也「遅れました」

詫びをして入る琴吹と軽いノリで入室する俺。

すると、どうだかづ中の様子は…

澪「…………」

律「うおお……」

唯「…痛そづ~」

明久「うん……」

怒りますといつ風に腕を組み仁王立の秋山と正座をし頭を押さえる田井中、

同じく正座をして田井中を見る平沢と明久の姿がそこにはあった。

そんな状況を見て隣りにいる琴吹は…

紬「えっと…マドレーヌ食べる?」

智也「何でだよ。」

思わずシッコんでしまった。

・・・・・・・・・

智也「へえ、合宿ね。」

・・・・・・・・

全員着席し、琴吹が人数分のマドレーヌと紅茶を用意すると秋山が喋りだした。

なんでも軽音部の強化合宿を提案したが平沢と部長と明久が、合宿=遊び=気分MAXになり全く話を聞かず、更には秋にある学園祭に向けての合宿だと説いたが、

初めての高校の学園祭 + 高まる期待 = 話が脱線になり違つ意味での火山が噴火したらしい。

ちなみに噴火の影響をモロに受けたのが部長である田井中だ。

澪「ムギと智也はどいつ悪いつ。

いくら荒てずやつてこいつって言つても、もう三ヶ用にもなるのに一度も合わせたことないなんて

紬「まあまあまあまあまあまあ…」

智也「……そりだな～さすがにヤバイな

そして俺は一度紅茶に口に含む。

とそこで琴吹が…

紬「行きましょうーーみんなでお泊まり行くの夢だったのーー！」

何やら、えらく興奮した様子で賛成1票を投げる。

その『みんな』は俺と明久も含まれてるんだろつか?

唯「そうなんだ～」

律「じゃあ海にする?それとも山にする?」

澪「だからーーバンドの強化合宿つて言つてるだろーー！」

律「冗談だつて~」

澪「まつたぐーーー。あー。智也はビリビリ細つへ・合浦」

智也「そつだな…」

「」で部長に怒り、ため息で何とか気持ちを整理した（気持ちよく分かる）秋山が俺に意見を聞いてくる。

セイド少しあえ込む。

智也「……確かに秋山の言つ通りだな。

軽音部が始動して未だに合わせたことがないところは、ハツキリ言つて危機感を覚えた方が良いと思つた

澪「うとうと。智也の言つ通りだ

律「おお…トモが眞面目なことを…」

澪「律

律「メンナサイ…」

失礼な事を言つてくる奴を秋山が黙らせる。

智也「」で学園祭にむけて一遍

ビシッと気持ちを固めた方が良いだろつな。

平沢もある程度はギターを弾ける様になつたんだ、合宿つてのは悪くはないと思つた

澪「流石智也だな！その通りだよー。」

俺の意見に感動する秋山。

苦労してるなお前……俺もだけど。

澪「という訳で軽音部で夏休みに強化合宿を行います！

いいですね！」

唯「私は元々賛成だから～」

律「もちろん私もOKだぜ～！」

紬「私も私も～」

明久「僕も～」

次々に賛成してくる4人。

平沢と田井中、明久は本当に理解してるのは怪しいが……
それから一つ、言っておかなければならない事があつたな。

智也「まあ、頑張ってくれ。俺と明久は不参加だがな～

唯・澪・律・紬」「…………」「」「

明久「えつ？僕も？」

時が止まつた……

律「……ハツ！えつ？何言つてんの？」

智也「何がだ？」

律「合宿だよ！合宿！何で不参加なんだよ！」

田井中がいち早く回復し身を乗り出しながら俺に質問してくれる。

明久「そうだよ智也。それになんで僕もなの？」

智也「じゃあ問題だ…平沢」

唯「はいっ 何でしょう？」

智也「俺と明久とお前等4人の違いは何だ？」

唯「え～っと…………あつ！DNA！」

智也「そりやそうだ。てか全人類がそうだ。不正解

唯「ええ～違うんだ…」

『DNA』って知つてたんだな。これはバカにしきが…

智也「琴吹わかるか？」

紺「え～っと……性別？」

智也「正解だ。後で田井中に何かおじつてもう一つとい

律「なんで私なんだよ…じゃなくて…それが理由か？」

智也「そうだ」

これが俺と明久が合宿不参加の理由だ。
何泊するのかしらんが、泊でもするのなら俺は行かない。
つてか行けない。

唯「え～っ なんで～？」

平沢が疑問の声をあげる。分からぬのかコイツは？

智也「…いいか。合宿つづうことは泊まんだろう?
修学旅行みたいに大勢じゃねえんだ。

若い少人数の男女が監理者もなしに泊まれるわけないだろ」

明久「あつそういうことか～なるほど～」

つて明久お前も今わかったのか……

まだ理解していない様子の田井中と平沢に説明をする。

と、ここで…

澪「でも…」

智也「ん?」

黙っていた秋山が口を開いた。

澪「それじゃあ智也と明久の練習はどうするんだ？」

智也「それは、お前らが合宿から帰つてきてから合わせるし、もちろん2人で練習する。サボリはしないさ」「よ

澪「それじゃあ合宿をする意味がないよ。

「これは軽音部の強化合宿なんだから智也も参加しないとダメだ

智也「……」「

確かにそなんだが……

あれ？ おかしいな？

俺の中じや秋山は俺の意見に賛同してくれると思つたんだが……まさかの裏切りだ。

唯「そりだよサツくん！私たちはこの6人で『文月軽音部』なんだから！」

トモ君とアキ君も行かなきゃダメ！

紬「私は『みんな』で行きたいの。だから智也君も一緒にね？」

智也「……」

澪「それにやつぱり監視者なしで男女が行くのは危ないかもしれないが、

私は智也と明久なら大丈夫だと信じているからな

律「そうだそうだ。澪と唯とムギの言つ通りだ！」

「ゆづか部長権限で強制的に連れて行くからな！」

明久「……今まで言われたら断るなんていえないよね智也」

皆「…………」「…………」

俺が口を開くのを待つ様に、10つの瞳が俺を凝視してくる。

智也「はあ……」

確かに秋山の言い分は正論だ。

何より合宿を強く勧めたのは俺だし。

それに……

『この6人で文月軽音部』

そんな事言われちゃあな……

智也「……分かったよ。俺の負けだよ。行けばいいんだろ……」

白旗を振り降参……敗者決定、俺。

澪「うんっ」

唯「やったー！」

紬「よかつたわ～」

律「……じてトモは合宿に参加することになつたのだった

智也「なんでナレーション口調なんだよ……」

明久「まあいいじゃない」

智也「一つ聞いていいか？スタジオ付きの旅館とかあるのか？」

俺の合宿参加問題が解決した途端、俺の口から別の問題が発生した。
軽音部の合宿なんだ、

楽器の音を出しても問題なく合宿できる場所なんて限られてくる。

ましてや俺達は学生。

スタジオ付きの場所なんて借りる金は無いに等しい。

唯「私、お金ないよ？」

智也「ちなみに俺もそこまではないぞ」

澪「そ、それは……」

宿泊費まで考えていなかつたんだろうな。秋山が口うるむ。

澪「ム、ムギ？」

紬「はいっ？」

秋山が琴吹に向やう話しかけていた。

澪「別荘とかあるか……」

智也「そんなのあるわけ……」

紺「ありますよ」

皆「「「あるんかい」」」

秋山が望み薄で琴吹に尋ねるとアッサリと返事が返ってきた。

それにより声が揃う俺達。

本当に琴吹って何者だ？本当にお嬢様だつたりするのか？

琴吹の寛大な心で無事に合宿場所を確保する事が出来た。

合宿？

昨日夜中までゲームをしてて気付けば俺は目覚めていて、目の前には自分の部屋の天井が広がるだけであった。
…にしても暑いな。太陽はもう活動を始めているようだし。
俺は枕元にある時計を見る。

7月30日 5：07

今日から軽音部の合宿日である

合宿の集合時間は8時。

ここから集合場所である駅まではゆっくり歩いても20分もあれば行ける。

つまり、余裕を持ったとしても軽く7時前までは寝られる計算となるのだ。

…よしもつ一眠りしよう。

……………

現在時刻は5時半。

俺は今シャワーを浴びているといひだつた。

あれだけ汗かいたんだ、やつぱり朝のシャワーは気持ち良いぜ！
…結局あの後眠れたのかつて？当然寝れなかつた。暑いし。

・・・・・・・・・・・・

朝飯も済んだし荷物も全部準備できた。

ギターも持った!、服装も身だしなみもある程度と整えた。

俺は時間を確認する。 7時10分、まだまだ余裕はある。

……やる事も無かつたので、俺はもう集合場所に向かうことにしてた。

予想通り、集合場所である駅前の広場みたいな所には誰も来ていない。

7時30分 集合時間まであと30分はある。

俺は傍にある円形のベンチに腰を下ろし、

イヤホンを取り出して音楽を聴きながら待つことにした。

・・・・・・・・・・・・

暫くして、見覚えのある2人がこっちの方に向かって歩いているのが見えた。

：見た感じ田井中と秋山だな。

俺はイヤホンを外し、2人に向かって軽く手を振った。

すると、2人もこっちに向かって走って来た。

智也「2人もおはよっさん」

律「よう、トモ！」

澪「おはよう智也。早かつたんだな

智也「まあ家にいてもする事無かつたしな。
暇だつたからわざわざ来たんだ。」

律「ふ〜ん。澪〜、今何時だっけ？」

澪「今……7時45分だけビ

7時45分…結構早いな。

正直ギリギリに来るのでとばかり考えていた。

澪「智也。唯とムギと明久は？」

智也「3人ともまだだな。明久からはもうすぐ着くってメールはあ
つた。

まあまだ待ち合わせまで時間はあるし、とにかく待つてよう
ぜ。」

そう言って俺たちは、さつき座っていたベンチで3人を待つことこ
した。

・・・・・・・・・・・・

あの後、5分位経つて明久と紬も到着した。

これあとは唯だけ……なんだが、その唯が不安でしうがない。

時間は刻一刻と過ぎていく。

時間が経つにつれて、嫌な予感が確信に変わつていつているのが分かる。

律「なあ、澪～。唯まだ？」

律がいきなりそう尋ねた。

澪「集合時間まであと2分あるんだ。その位待つてやれ」

紬「そうですよ。唯ちゃん、きっと来ますっ！」

今日は大丈夫だよなアイツ……

そこへ

唯「歸～おはよ～」

噂の張本人がやってきた。

時間は8時一度かまあ遅刻したわけでもないしいいか。

律「唯～遅いじゃね～か？心配したんだぞ？」

唯「『めんど』めん。途中で荷物持つてくるの忘れてて～」

明久「荷物忘れるつて」

唯「エへへへへつ」

智也「それで、じゃあ全員揃つたことだし行くか」

俺たちは切符を買い、

電車に乗って琴吹の別荘近くの駅まで向かった。

駅に着き別荘に向かつて歩いていく。

潮風を感じつつ駅から5分程歩くと、いかにもリゾートにありそうな感じの建物に到着した。

どうやら「ココ」が琴吹の別荘らしい。

大きさは…恐らく俺の住んでいるアパートよりも大きい。

これでもビックリなんだが琴吹曰く

『本当はもっと大きな所を借りたかったんだけど、一番小さい所のここしか借りられなくて…』

と言つことらしいからまたビックリだ。…これで十分です。正直、こんな所にタダで滞在していいのだろうか…?

俺は罪悪感丸出しで別荘の中に入つた。

合宿？（前書き）

あけましておめでとうございます。

これからも『バカとけいおん』と『呪喚獣』をよろしくお願ひします。

合宿？

律「おおーほほーい。」

唯「わあー、ゅうーい。」

明久「…うわー。」

玄関の扉を開けると、海の見える広々としたリビングが広がっていた。

俺は一瞬旅番組でも見ているんじゃないかと錯覚した。明久と律と唯の反応もこの手の番組にありがちなんだが、それ以上に部屋がすゞく綺麗だ。

智也「……本当にタダで泊つていいのか？」

俺は恐る恐る確認してみることにした。

琴吹「もちろん…だつて別荘ですしね…」

琴吹には本当に感謝しなければならないと感じた瞬間であった。

澪「…ん~」れば……。」

どりやら澪が何かに気付いたらしく。

智也「どひつた?」

澪「ほり、しれ…」

秋山の指差す方を見てみると、高そうな果物が盛られた器があった。
高やつ……とか見たことないようなモノまであるな……。

紬「あつじめんなさい。

何もしておかなくていいって言つておいたんだけど……

智也「え？」

俺は思わず声を発してしまった。

他にも、大富豪の家にありそうな天井付きのベッドがある部屋があつたり、

冷蔵庫には高そうな食材が鮮度を保つた状態で入っていたり、

……ああこの家には俺たちが到底味わえないような世界が広がっている。

そして、なんでだろう。俺の住んでいる環境がちっぽけに見えてきた……。

紬「ビツビツ」

紬に案内されて俺と秋山と明久はある部屋に入つた。

そこにはドラムやアンプ、それにマイク

……そう、バンドの練習には欠かせない機材が置いてあつたのだ。

琴吹の言つていたスタジオとは多分この部屋の事だらけ。

海岸に面していて雰囲気もなかなか洒落ている。

……うん、最高の練習場所かも。

紬「しばらく使っていないから、ちやんと動くかどうか心配だけど……」

俺はマイクを、秋山はアンプを確認する。マイクもアンプも大丈夫だった。

智也「……ん？ 平沢と田井中は？」

明久「そういうえば途中でいなくなっちゃったみたいだけど……」

そういうえばどうか行つたな、あの2人。

まあ、あとで来るだろうからいいか。

澪「全く……しようがないな……。」

溜息交じりに呆れていた澪はバッグの中から何かを取り出していた。

バッグの中から現れたのはラジカセだった。

明久「何コレ？」

澪「ああ、コレ？」

そつぬうと澪はラジカセの再生スイッチを押し、ラジカセを床の上に置いた。

すると、ビニールのロックバンドのものであらう演奏が流れてきた。

澪「昔の軽音部の学園祭でのライブ……」の前部屋で見つけたんだ

智也「すげえ……」

俺たちは言葉を失っていた。

紬「……私たちより相当上手い」

澪「なんか……聞いてたら、負けたくないなって……」

明久「それで合宿って言い出したんだね」

いくらい平沢が初心者だからって、
もうあれから3ヶ月は経とうとしているのだ。
文化祭も迫っているし、そろそろみんなで合わせてもいい頃だろ？
だが、俺たちは残念ながら1回も合わせて演奏をしたことがない。

紬「……負けないと思つ、私たちなら」

智也「……俺もそんな気がするな」

……なんでこんな事が言えるのかは自分でも分からなかつた。
それは、今の秋山を励ます為でも何でもない。
ただ、本当にそんな気がしただけだったのだ。

そう思つた矢先であつた。

律「よおうし、遊ぶぞ——！——！」

唯「オー、イエース！…」

勢いよくドアの開く音がした…かと思えば、遊ぶ気マンマンの2人がそこにいた。

…その証拠に、すでに水着を着ている。
さらに、平沢はビーチボールを、

田井中はモリ（コイツ、黄 伝説でもする気なのか…？）を構えていた。

澪「ちょっと待て！練習は…？」

唯「先行つているから、4人とも急いでねー」

秋山の思いも虚しく、平沢たちは早くも海へと行ってしまった。

澪「…これでも…？」

智也「…」

俺は何も言えなかつた…いや、言つ氣が起こらなかつた。

律「おーい

唯「早くー！」

既にバカنسな2人の呼ぶ声がする。

紺「ちょっと待つて…すぐ行くからー」

明久「少し待つてすぐに行くから」

ちょっと待て、明久も琴吹も遊ぶ気なのか？

紬「行こ、澪ちゃん、智也君」

澪「え！？ ムギも遊ぶの？」

俺はどうしたらいの分からない。

紬「せっかく来たんだし、少しくらいなら…ね？」

そう言つた紬は満面の笑みを浮かべていた。

明久「少しなら良いんじゃないかな？」

2人完全に遊ぶ気だ…どうすれば…。

澪「でも…私は…。」

紬「…じゃあ先行つてるね。私、待つてるから」

明久「僕も行つてるね」

そう言つて、明久も琴吹も行つてしまつた。

スタジオに残されたのは、俺と秋山だけ。

俯き加減の秋山の顔を覗くと、目に涙を浮かべているのが分かつた。

澪「…なあ智也、私どもしたらいいの……？」

智也は声を震わせてそう言つと、その場に座り込んでしまつた。その肩は小刻みに震えている……多分、泣いているんだろう。俺がもし秋山の立場なら、4人にブチギレているかもしれない。秋山の思つてゐる事がなんとなく分かつた気がした。

俺は秋山の傍に座つた。

智也「俺だつて分からない。

でも……さつき、昔の軽音部に『負けないと思つ』って言つたよな？」

秋山は俯きながらもこくつと頷いていた。

智也「確かに、昔の軽音部は上手いよ。

俺だつて一瞬プロがやつてゐるものかと思つたぐらいだし。
……だけど、勝つ為には技術面だけじゃ足りない気がするんだ。

＞チームワークくつてモノが無ければ、何だつて決して上手くは見えない。

：俺たち6人で力を合わせて全力で演奏する
そうすれば、必ず結果は出でくると思うんだ。」

澪「智也……」

智也「確かに明久たちは遊びに行つたけど……。

要是メリハリを付けて練習すればいいんじゃないかな?
例えば、朝と夕方は練習して昼と夜は思いっきり遊ぶ
……みたいな感じで。ずっと練習じゃ疲れるだろ。

少しならココフレッシュショットで良いんじゃないかな

そう言って俺は立ち上がった。そして、海岸の方を見る。
やつぱり、平沢たちは楽しく遊んでいるようだった。

智也「見てみるよ、アイシラは楽しそうに遊んでいるじゃないか。
きっと楽しいぜ、ひやつてみんなで遊んだら」

言つてる俺も遊びたくてウズウズしているのが分かつた。

智也「それにさ秋山は一人で溜め込みすぎなんだよな。
こいつことは一人で溜め込まないで、
相談すればいいよ。相談事なら俺も一緒に考えるしさ。
まあいい案が出るかは別だけど……って言つてなんか恥ず
かしいな——」

澪「智也……」

智也「ん、なんだ?」

澪が顔を赤らめながら、何かを言つたやつにしていった。
もつその田に涙は無かつた。

澪「その…………ありがとう。」

澪はそっぽを向いて、俺にしか聞こえないような声でさつと言つた。

智也「よしーじゃあ俺達も行こう。」

そう言って、俺たちは海へと繰り出して行った。

智也「悪いな、待ったか？」

律「トモ遅いぞー！」

唯「早く早くーーー！」

といつ訳で、俺たち軽音部一同は毎晩は思いつきり遊ぶことになつた。

俺も当然のように水着に着替えて、

田井中たちの待つ（先に遊んでいましたが）海岸に来たのだ。
ちなみに、秋山はまだ準備が出来ていらないそうだ。

まあ女性は準備に時間がかかるらしいからな。

澪「お待たせーー！」

数分後、ようやく秋山もここに来た。

律「あー！澪ー。じゃあ行こうぜーーーーー！」

秋山を見るなり、田井中と平沢の表情がたちまち変わつていつた気がする。

唯「澪ちゃん……」

律「喰らええええっつーーーーーーーー！」

田井中は傍にあつたビーチボールを勢いよく投げつけたのだ。
投げたボールはそのまま秋山の顔面にクリーンヒット。

ビーチボールだから怪我は無かつたものの、

これが硬球とかだったら……と考えるだけでもゾッとする。

律「唯、泳ぐぞ……」

唯「うん……」

律「澪の裏切り者…………」

そして、当て逃げするかの如く2人はそのまま海へと叫びながら消え去つていった。

明久も海の中に入り何かを唱えているし……

秋山「…………痛い」

智也「だ、大丈夫か秋山？」

俺は秋山を心配して振り向くと明久たちの理由がわかつた。

正直に言つと秋山はナイスバディでした。

……ヤバい、体が急速に火照つていく感覚がした。

このままじゃ理性が飛んでいきそうだ。目のやり場にも困る。

……ジロジロ見てたら変態扱い間違いなしなので、とりあえず落ち着こう。

俺は澪の方から視線を逸らした。

澪「……けど綺麗なところだな」

智也「だな」

俺は視線を逸らしながらそりつい。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

そして俺は田井中が持っていたモリを持ちながら魚を取っていると

律「おーい、トモー！」

遠くの方から俺を呼ぶ声がする。

俺は魚を探すのをやめ声のする方へ泳いで行った。

唯「ねえねえ、何書いたの～？」

平沢を見ると、

砂浜に描かれた鳥の地上絵の真ん中に顔だけ出して生き埋めにされていた。

他の4人は大爆笑している。

俺も思わず笑ってしまう。

智也「……！」、これ、誰がや、やつたんだ？」

俺は笑いをこらえ質問した。

律「ハハハ、私がやつたんだ！！」

田井中がグラグラ笑いながらそう言った。

俺はそう思つと近くの木陰においてある荷物の中からカメラを取り出し

今の平沢の状況を写真におさめた。

明久「そういうえば智也は何をしてたの？」

智也「ん？田井中が持つてたモリで魚とつてた。見るか？」

俺はカゴの中に入つている魚などを見せた。

律「おお～凄いな～トモ」

明久「これどうするの？」

智也「もちろん食べる。今日の晩飯になるかなと思いま

明久「まついいか……」

その後はモリを置きカゴを海につけて逃がさないようにして皆と遊んだ。

そんなこんなでいつの間にか陽も暮れようとしていた。

夕日が水平線に沈みゆく

ありがちな感じだが、なかなかの絶

景だ。

：今日は本当に楽しかつたなあ。

地上絵（？）事件に秋山が藤壺にやたら怯えていた事、さらにはビーチバレーとかもしたりしたな。

唯「はあ～海水飲んだ～。」

律「辿り着いたぞ～、黄金の島ジパング！」

そんな事言つて砂浜に仰向けで倒れこむ唯と律。

智也「俺たちずっと日本列島にいだろ」
ジパング

田井中の発言に俺のツツミ^{ツツミ}が華麗に炸裂。

澪「まだまだ…」

律「おっ、いつの間に」

さつきから突然どこかに姿を消していた秋山も登場した。

明久「スイカ割り？」

澪「…せつから海に来たんだから思つ存分遊ばないと、

「ここまで來た意味が……」

そうだな。秋山の意図とおり……

智也・澪「あ―――練習―――」

律「忘れてたのかよ！」

そこへ田井中のジッコリが入る。

澪「ま、まつたく……」律が『遊ぼー』とか言つからだぞ～……

律「一番楽しそうに遊んでいたのは誰だ……？」

田井中にそりゃ言わると秋山はジト目をして田井中の方を見つめていたんだが、

「実は一番楽しそうに遊んでいたのは秋山だろ」とは誰も言わなかつた。

・・・いや、言えなかつた。

合宿？

律「ふう、美味しかったー」

紬「（）馳走様です、智也君に明久君」

澪「にしても2人とも。なかなかやるじゃないか」

智也「ふう～、そりゃ良かった」

明久「喜んでもらえてなによりだね」

食べ終えた食器を片付けながら、俺はそう返答した。

今日の夕食は俺と明久が俺が昼間に捕まえた魚を使って料理した。

唯「でも本当に美味しかったね～」

平沢の発言に対し全員が「うん！」と頷いた。
…喜んでもらえたんなら嬉しい限りだ。

澪「じゃあ今から練習だなー！」

澪が意気揚々とした表情でそう言った。

律「え～」

唯「もうちょっとゆっくりしてよー」

さつきまでハイだつた2人は早くもだらけていた。

澪「昼間思いつきり遊んだだろ…。夜はしっかり練習するぞー」

智也「俺と明久は洗い物だけしてから行くわ」

紬「え…でも、それじゃあ2人に何だか悪いわ。

私も手伝いましょうか?」

智也「いいよ。気にするなよ。

そこのだらけきつた2人を連れて準備してもらつていいか?

すぐに行くから

それに高そうな食材と食器を使つたせいか、

心なしか罪悪感があつたりするし・・・・・・

紬「……それじゃあ、お願ひします。」

そう言って、秋山たちは一足先にスタジオへと向かつた。
俺と明久も腕をまくり、台所へと向かつた。

・・・・・・・・・・・・

智也「よーし、お待たせお待たせ。

さあ練習始め……つて、何だコレ?」

洗い物終え、ギターケースを持つてスタジオに入った
俺の目に写ったものは床の上で寝そべっている平沢と田井中の姿だ
った。

完全にココで寝ようとしているのがよく分かる。
てか、下手したら寝てる。

澪「練習始めるぞー!..」

紺「2人とも起きてー!..」

明久「2人とも練習しようよ

智也「…コイツらずっとこんな調子なのか?」

俺は注意する2人に一応聞いてみた。

…案の定頷かれました。

明久「…どうするの?」

澪「ムギ、智也、明久…ちょっと退いてて」

そう言ひと、秋山は自分のベースと繋いでいるアンプを
寝ている2人の近くに勢いよく叩きつける。

未だに2人の返事は無い。

秋山はそれを確認すると

。

…次の瞬間、スタジオ内に爆音が走った。

爆音といつても、アンプに繋いだ澪のベースの音なんだが。

…とうの平沢と田井中はといふと、

その爆音を至近距離で聞いて完全に起きた。

・・・・・・・・・・・・

秋山と俺は練習の準備中。

一方、平沢と田井中は完全にやる気なし。

律「なあ～、今日はもう止めてよ。」

何も練習せずに合宿一回を終えるってのはいかがなものかと思つが。

澪「練習が目的でココに来たのー。」

律「そりやそりだけじれ。」

澪「そういえば律……最近ちょっと太ったんじゃないかな？」

特にお腹のところとか……最近ドラム叩いてないからかな。

練習させる為についに田井中を弄り始めた秋山。

それを真に受けた律は狂ったかのようにドラムを叩き始めた。さすが秋山だ。さてこれで安心して練習に励める。

かと思えば……。

唯「もうギター持てない……。」

澪・智・明・紬「「「えええつづ……」「」「」「」

唯「だつてこのギター重いんだもん……。」

智也「だから軽い奴にしておけって言ったのに……」

唯「誰だー、このギター買つって言ったのはー?」

智也・澪「「お前だー……。」

・・・・・・・・・・・・

唯「そろそろ床暖まつてきたね~。」

律「ああ……。」

……結局、努力虚しく2人はさつきの状態に戻ってしまった。
いや、床の冷たい箇所を転々とゴロゴロしているからせつかり状
態は酷いな。

紬「服…汚れちやうわよ」

唯「アハ、またひんやり……」

せめて人の話を聞けよ。

澪「そんなんで学園祭どうするつもりなんだよ……」

律「だーかーらー、メイド喫茶がいいつて言つてんだろ」

唯「お化け屋敷だよー」

明久「でもクラスの模擬店だってあるよね……」

模擬店2つも抱えるなんて無理じやないかな?」

そう、俺たちのクラスや秋山たちのクラス、

明久たちのクラスも模擬店を出すことになつてているのだ。
確か俺らは焼きソバ売るつて話になつていたな……。

明久と秋山たちののクラスは……後で聞けるか。

律「でもさ……澪を見てみろよ。

澪「ほどメイド姿似合つ奴なかないぞ」

澪「な、何よ……」

律「黒のストッキング、純白のエプロン、そしてメイドカチューシヤ!!

『萌え萌え~キュン』なんて言つたりしてな……。」

智也「……最後の台詞はともかく、秋山にメイドは似合つそつだな」

唯「可愛いかも……」

律「 なんてな、冗だ……」

「ゴジン！――

……恐らく今シーズン最強の鉄拳が律の頭に飛んでいった。
田井中は完全にKO。

合宿？

練習はひとまず中止

キャンプファイアーの音がメラメラと聞こえる。

俺たちはといつと、外に出て潮風を浴びながらひと時を過ごしていった。

智也「……こしても、本当に良い所だな。」

俺はスイカをかじりながらふとそう言った。

澪「そうだな。…………こしても、終わったらちゃんと練習するからな

律「わかってるってー！」

律はそうウインクした…不安だが、信じてやる」とこじょへ。

紬「うんー！」

紬もそれに続いて頷く。あれ、そつこえは唯がいないような…。
ま、いざれひよつひよつ出てくるだらつ……そう思っていた矢先だった。

明久・紬「せーの一ー！」

「ん、何が始まるんだ？」

いきなりの展開に戸惑っていた刹那、前方からは花火が噴き出した。

そして花火と同時に1人のシルエットが映し出された。
まるでライブ会場にいるようだった。
そしてそこにいるの平沢だった。

唯「それじゃあ最後の曲、行つくぜえ——！——！」

……さう言つと唯はピックを弦にかけた。そして。

唯ソロでの^{ライブ}演奏が始まった。

……驚いた。本当にきちんと弾けている。

、
演奏の間、無限の花火が舞台を彩つていた。

……気付けば鳥肌が立つていて俺がいた。

この演奏に痺れた。感動した。

唯「オーケー、オーケー、オーケー！ってアレ？もう終わり

……

明久「予算が

紬「いつかまた……」

律「そうだな、武道館公演で派手にババババーンと……！」

唯「武道館……？」

律「オイオイ、目標はソコだつて決めただろ……なー

田井中は秋山に向かつてさう言つたのだ。

そういうえば、『田舎せ、武道館ライブ……』なんて格好いいことと言つてたつけな。

智也「……なあ秋山。俺たちの思つた通り……いや、思つていた以上だ。

軽音部^{ウチ}な

澪「その言葉……分かる気がする。」

智也「このまま本当に武道館ライブまで行っちゃうかもな、俺ら」「ホント……武道館田舎すなうら、まずこの位はできる様にならないとな」

秋山がそのままラジカセを取り出した。
再生ボタンを押すと、今朝朝と同じようにノリのいい音楽が流れ始めた。

律「へえ～、上手いな～」

田井中：あの時わざと遊びに行つてたつけな。

唯「でもこの曲……」

ん？この曲に何かあるのか？
そう思った刹那……

『お前が来るのを待つていたあ……』

このフレーズの後、何とも言えないクレイジーな叫びがラジカセか

ら聞こえた。

澪「聞えない聞えない聞えない聞えない……」

断末魔の叫びを一番近い位置

(持っていたラジカセから流れたので必然的にそうなる)で聞いていた秋山がしゃがみ込み耳を塞いでスキルを発動させた。

律「ニヤツ

そんな秋山を見てわざわざ声にだしてニヤリとする田井中。

智也「……何するつもりだ?」

律「ちよーっとねー

俺の言葉を曖昧に返し、嬉々と秋山に近付く。

澪「聞えない聞えない聞えない……」

律「ふじつぼ

澪「キヤーッ――!

律「膝の皿屋敷……

澪「イヤだー！イヤー！イヤだよ～…………ううう……

智也「あ～あ……」

田井中の呪いの囁きによつて俺達に背を向け、遂に泣き出してしまつた。

智也「おい、田井中やりすぎだ」

唯「本当だよ」

律「…あ、ゴメン…悪かつたな～澪」

明久「大丈夫だよ秋山さん」

紬「澪ちゃん大丈夫だからオバケなんかじゃないわ」

澪「…ほんと…？」

秋山がこちらを向いた。

唯・律「キュルルルリーン!」「

秋山の泣き顔。プラス潤んだ瞳を見てときめく平沢と田井中。琴吹も若干頬が赤い。俺と明久は咄嗟に顔を背けた。正直言うと今の秋山は凄く可愛いかった。

唯・律「萌え萌え～キュン！」

これが今のこの2人の心境らしい。

合宿編？

律「「メンな～澪～」

澪「ふう～」

あの後、泣きやんだ秋山と昇天しかけてる3人？を促しスタジオに行き、練習再開と思いギターを軽く弾いていると…

（

俺のギターからではない所から同じ音が聞えた。

智也「ん？」

どこのからだと思い視線を巡らせる…

唯「Hへへ～トモ君のマネ～」

弾いていたのは平沢だった。

紬「唯ちゃん、でも本当にわたくしの曲…

唯「うんつー見てて～えーっと…」

（

紬「うそ…」

智也「……」

平沢がギターを弾く。

そこは別にあまり問題はない。…その弾いてる曲が問題だ。

平沢が奏でている曲は先程外で流した昔の軽音部のギターパート。

スピードなどは遅いが、それでも音程を間違える事なく弾いている。

まさか…
智也

唯「はいっ…びっ…」

紬「す」「…完璧～」

唯「Hへへ～どひだつたトモ君?」

智也「…」

唯「トモ君?」

明久「びひじたの智也?」

平沢が感想を求めてくるが俺はある可能性を考えていた。
その可能性を確かめるために口を開く。

智也「…明久」

明久「なに？」

智也「今から適当にキーボードを軽く弾いてみる。んで平沢

唯「なに？」

智也「明久が弾いた音をギターで再現してみて」

唯「？…わかった」

澪「なにするんだ智也？」

智也「実験だ」

澪「実験？」

智也「ああ…明久頼む」

明久「う、うん」

（

キーボードから音、そしてそれを…

見事に再現。

澪「智也……」

智也「ああ……」

秋山が俺と同じ考え方で達したらしく驚愕の表情をして俺の名を呼ぶ。

律「おお～すげ～な～唯一全く同じだー！」

唯「エヘヘ～ありがとう～」

紬「ゆ、ゆ、唯ひやんー今から出す音、当ててみてー。」

唯「う、うと わかった」

琴吹も気付いたようだ。

興奮した様子で平沢に提案する（田井中と明久は気付いてないらしい）

紬「これは？」

唯「？」

紬「じゃあこれは？」

唯「ソ

紬「…これは？」

唯「ソ

紬「…

智也「どうだつた琴吹？」

惚ける琴吹に問い合わせる。

琴吹の答えによって俺が平沢に感じてる可能性が確信になるだろ？

紬「全問正解…」

律「えつ？ 唯、お前…」

明久「平沢さん…」

確信になつた。

そして明久と田井中も氣付いた様だ。

紬「ソソソソジ…ソソソ

唯「なに？なに？」
「うしたのみんな？」

俺達が一斉に平沢を見る。

1人分かつてない平沢がキヨロキヨロと俺達を見る。

智也「平沢『絶対音感』持つてるな」

唯「ええつー？『絶対音感』……ってなに？」

理解出来なかつた。

律「知らんのかいつ……」

唯「はあ……」

部長渾身のシッコ!!。

しかし『絶対音感』を持つてるのなら納得がいく。
俺の真似やギターパートのコピー、
これらを一度聞いただけで音程を間違えず再現するなんて
『写〇眼を持つコピー忍者』か『絶対音感』を持つている以外有り
得ないからな。

澪「……っていうのなんだよ『絶対音感』は

唯「へえ～そうなんだ～すい～ね澪ちゃん！
色々知ってるんだ～！」

澪「いや、すい～のは唯の方なんだけど……」

まあ本人が余り理解してないので宝の持ち腐れな気がするが……

「でもみよーんつてところが分からぬんだよね。」

絶対音感を『へえ』程度で受け流すつていうのは、すごいのか天然なのかどっちだ？

澪「それってたぶんチューイングの1つだと知るよ。」

秋山がそういうと田井中が平沢にチヨリクスリーパーをかけた。

智也一ソレ全然違うからな」

明久「え？ じゃ、あなたにそれ？」

俺は実践してみせる。

唯・律・明久「「「おお一一。」」

智也「じゃあ、やってみる」

唯「うん

平沢はみよーんといつ音を弾くとくすくす笑い出した。

唯「ふふふ、あはははは。なんかこれ変。」

何だ、ツボにはまつたのか?
変なところにツボがあるな

律「ツボだったみたいだな」

田井中も理解しているようだが、
秋山はツボという言葉を受けてふじつぼを思い出したのだろう、
再びうずくまってしまった。

合宿？

俺がふと時計を見上げるともう一時を回っていた。

智也「おーい、みんな。練習もいいけど、

そろそろ風呂に入つたほうがよくなのか？」

その言葉を受けみんな時計を見る。

澪「あ、確かに。じゃあそろそろ風呂にでも入るか」

唯「そうだね」

明久「じゃあ、みんな先に入つていいよ。」

明久は一応レディーファーストといつ言葉を実行する。

紬「あ、そのことなんんですけど、

この別荘には露天風呂が男性用と女性用で二つありますよ。」

琴吹が解説してくれる。

それについても露天風呂が二つって……もう凄えとしか言えねえ……

カボーン

壁の向こう側から女子の声が聞こえてくる。

律「おーい、そつちばどひだ？」

田井中が壁の向こう側から聞いてくる。

明久「ちよつどいい位の湯加減だよ」

智也「それにしてもまさか露天風呂まであるなんてな

明久「今日はほんとに楽しかったね」

智也「楽しかつたつていうけど、これ本当せ合宿できてるんだぞ。」

明久が本来の目的からずれたことを言つたので一応訂正しておく。

明久「わかってるよ~」

智也「本当か? お前は調子が良いからな~」

明久「大丈夫だよ。僕だってやる時はやる…………はずだから

智也「はずじやねえよ~やれよ」

俺は明久と談笑しながら風呂に入っていた。

智也「じゃあ、そろそろ俺は上がりとくから
お前よりも話に夢中になつてのさせなこよひしねよ」

俺は壁越しに女子にそつ抜け風呂から上がる。
明久も俺に続いてあがってきた。

さてと、俺は一足先に上がつて皿主練でもしどりますか。
それから女子たちが上がつてくるまで明久と曲作りに励んだ。

女子が上がってからは居間でトランプなどをしているのだが……

智也「はい、俺あがり。なあそろそろ寝ようぜ。

そろそろ日付が変わるべ。」

律「まだまだ。トモが負けるまでだ!」

明久「そうだよ智也。勝ち逃げはダメだよ

俺が極端に勝つてしまつたせいで変に田井中と明久が
やる気を出してしまい一向に終わらない。

ちなみに今のところの成績はババ抜きで5回連続トップ、
大富豪で3回連続トップという今日だけ
1年分の運を使い果たしているんじゃないかといふくらいの状況だ
った。

そして周りを見ると平沢と秋山は寝落ちしていた。

智也「ほらよく見ろ平沢と秋山はもう寝てるだろ?」が

律「まだ、トモは大丈夫だろ」

智也「大丈夫じゃない。俺も正直眠いんだ。
もう何が何でも終わるぞ。」

明久は平沢をベットまで運んで運んで行つてくれ。

俺が秋山を運んでいくから

律「おつ?いいのか?」

智也「良いも悪いもお前と琴吹に任せてもいいけど大変だろ。
それに琴吹も限界そうだしな」

俺が琴吹を見てそういう

琴吹は目をもつとんど閉じていよいよいつな状態だった。

律「じゃ~お願いするわ。

ムギーここで寝るな~ベットまでいくぞ~」

智也「じゃあ、明久は平沢を頼むな」

明久「了解!」

そして俺と明久は秋山と平沢を抱えベットまで運び、軽く部屋を片付けてから就寝した。

合宿？（後書き）

合宿一日目終了

合宿？

（翌朝）

普通ならさわやかな目覚めといきたかったのだが、なぜか大量にセットされた目覚まし（後で問い合わせたら田井中が仕掛けた）によつて大音量に起こされ自然と不機嫌になつてしまつた。

ちなみに明久は俺より先に目覚めていたので被害は受けなかつた。

澪「おはよう智也」

秋山が声をかけてきた。

智也「…………ああ、おはよう」

澪「どうかしたのか？」

智也「…………何でもない」

澪「そうか？まあとりあえずみんなそろつたことだし朝ごはん食べるとしよう」

律「そうだぜ。朝ごはんは食べないと元気が出ないからな。つてわけでいただきまーす」

澪「…………いただきます」

田井中が先に一人で先に食べ始めたのであわててみんなも手を合わせて食べ始めた。

智也「それで、今日の予定は？」

俺は「」の合宿の取り締まりである秋山に尋ねる。

澪「当然今日はお昼までみつちつ練習だよ」

律「えへ、せっかくリゾート地に来たんだから遊びぼっち練習だよ！」

唯「そりだよ澪ちゃん。せっかくなんだから」「せりほん

田井中と平沢は練習に反対する。

澪「ダメ！ 昨日は遊び過ぎちゃったから今日はちゃんと練習するの！」

律「じゃあ、澪は遊びたくないんだな

澪「そ、それは・・・」

答えに詰まる秋山。

まあ遊びたいんだな。

智也「それじゃあ、11時まで練習して帰る2時までは自由行動でいいんじゃないかな？」

今の時間は午前7時これから身支度したところで練習始めるのは8時には大丈夫だろ。

だから、練習時間は3時間。

それだけあれば十分だろ……今は

澪「ああ、それでいいんじゃないかな」

心なしか嬉しそうな顔をしている。

やつぱり遊びたかったのか。

結果、練習は大成功だったと思つ。

一応ちやんとみんなそろつっていた。

澪「やつぱりまだまだ完璧じゃなーいな

秋山が感想を漏らす。

智也「でも少しすつは出来てこいるんだから今はこんなもんじゃないか？」

澪「でも、やるならもう少し上を狙つてみたいかな」

智也「それはな。まあこれは部活中にな

澪「そうだな。じゃあそろそろ遊ぶか

そうこうして秋山は自分の楽器を上づけ始める。

智也「遊ぶのもこけど程々こしたことない」と帰る時間忘れる

澪「大丈夫、大丈夫」

その後1時半まで遊び片付けてから帰宅した。

合宿？（後書き）

これで合宿編は終了です。

夏休み最終日

明久・陽一「助けて智也!」「

本日8月31日、学生にとっては夏休み最終日である。

智也「嫌だ。自業自得だ」

そんな日にバカたちが俺の家に訪ねてきた。

明久「そんなこと言わないでよに頼むよ。

今年は合宿とかいろいろあって忙しかつただもん」

今、俺が頼まれているのは夏休みの課題を手伝えというもんだ。

智也「そんなもん言い訳にならない。

ってか明久と俺は同じ部活だからそれはわかるけど、

俺はちゃんと終わらせてある。

で、陽一にいたつては完全に自業自得だ!」

ちなみに俺の家には明久と陽一の他に、雄一と秀吉、康太の計5人が来ていた。

俺を含め6人もいるので今は居間に上がっている。

勝手に上がりやがった。

智也「秀吉を見習えよ。秀吉だってちゃんと部活に出ながら課題を終わらせていつてるだろ?が!」

秀吉は課題をあと2つとまで終わらせていたのだが、

雄一は半分ほどだけ終わらせていた。

そして残りの3人はほとんど手付かずだった。

智也「つてか何で雄一は半分しかやつてないんだよ」

雄一「途中でめんどくさくなつた」

陽一「マジで頼む。明田なんか奢るから」

康太「…………頼む。力を貸してくれ」

智也「だから、嫌だつて。めんどくさいし」

明久「じゃあせめて答え写すだけでも……」

3人はやけにしつこく頼んでくる。

雄一に至つてはやる気すらなし。

秀吉はその間に少しずつ終わらせていつている。

智也「あ～分かつたよ。そのかわり貸しーだからな」

明久・陽一「イヤツホーーーツー！」

康太「…………（グッ）」

雄一「じゃあ、見せてもらおうかな」

智也「おい、雄一もかよ」

雄一「こいつ等が課題を出すんなら俺も出すぞ」

……まつたくやれやれだ。

今の時間は午前9時。（課題完了率0%）

宿題の量、半端なかつたけど間に合ひうのか？
まあ間に合わなくても俺には関係ないか。

俺が冷蔵庫から飲み物を取り出し

一応皆に配りうると同時に戻ると陽一は携帯でどこかに電話していた。

陽一「ん。そ、うだよ。お願ひね。じゃあまたあとで」

智也「また後でつて」とは誰かを「」と呼んだのか？

陽一「お、う、ちょっと助つ人を。あ、でも心配するな。

別にお前の知らないやつじゃないから。むしろよく知つてゐる
人たちだ」

俺は呼ばれた人物について考えを巡らせた。

俺がよく知つてゐることは中学の頃仲良かつたやつか？
それとも、今のクラスメイトか？

つてか俺の家なのに俺の承諾なしでかこのやうひ・・・・・

陽一「お、い智也。早く出してくれば

あんまりのんびりできないから

陽一たちにせかされた俺は現実に戻ってきた。

智也「ああ、悪い。ホイ、これ。」

俺は自分の夏休みの課題を放る。

……マイシなにさまのつもりだよ

（約30分後）

ピンポーン

チャイムが鳴った。

陽一「お、来たかな？」

智也「だから誰だ？」

陽一「まあいいから。玄関開ければわかるんだから」

俺はインターホンにつながっている受話器を取った。

そこから聞こえてきた声は・・・

唯「ヤツホー、トモ君。私だよ。唯だよ～」

平沢の声だった。

澪「あ、唯だけじゃなくて私たちもいるよ」

（アリバウ

秋山の声まで。

しかも私たちつてことは・・・

ドアを開けるとそこには、軽音部のみんなだった。

律「よつトモ。あたしたち、春原に頼まれてきたんだけど」

そつか陽一のやつが呼んだのはここからだつたか。

智也「ああそうか、まあ上がってくれ。

まあ他のヤツらもいるが気にしないでくれ」

律「それじゃあ、遠慮なく」

田井中と平沢が先導を切つて本当に遠慮なく上がってきた。
そしてみんなを居間に案内し、俺は台所でお菓子などを用意する。
まあ人数が増えたんだから俺がやらなくても今日中に終わるだろう。
そう思い居間に戻ると、みんなそれぞれ課題を写してかかっていた
のだが、

澪「ああ智也。ありがとう。

それと悪いけど智也も手伝ってくれないか?」

笑顔で切り出した秋山。

智也「……なんでだ?

つてかその人数居れば俺が手伝わなくとも大丈夫じゃないか

?

澪「律と唯も課題まだみたいでついでにと思つてきたみたい。
だから実質7人分なんだ」

なるほど、そういうことだつたか。
おかしいと思つてたんだよ平沢と田井中が遊ばずに手伝いに来るなんて。

智也「…………ああ、分かつたよ。手伝つから。

…………せつかく久しぶりにゲーセンにでも行こうと思ってたのに……」

澪「ありがとう智也。じゃあ、あんまり時間無いから集中していくぞ」

そういう秋山も話さずに課題を黙々と移し始めた。

ちなみに秋山と琴吹が平沢と田井中に、
俺が残り5人ということに…………あれ？俺の負担でかくないか？
まあ秋山は人見知りするタイプだし仕方が無いか？
それに秀吉はもう終わりそうだし、雄一もなんやかんやいいながら
ペースが速いからな。
…………問題は明久と陽一と康太の3人だな。

（午後1時（課題完了率40%））

今は7人分の課題を10人で集中してやつてるわけだから
1人でやるより早いスピードで課題が片付いていく。

グウ～

誰かの腹の虫が鳴った。

智也「そういえばもうこんな時間か。

みんな、そろそろ毎日はんにしないか？」

俺が提案すると、

紺「うん。お願ひ智也君。わたしもいつも腹ペコペコ」

律「そうだな。ちよつと私もお腹減ってきたといふだしな。」

雄二「俺も腹が減ってきたな」

明久「僕もだよ～」

澪「それじゃあ私もお言葉に甘えて」

みんなそれぞれの言い方だが賛成を示す。

智也「わかった。じゃあなんかぱつと食べられるもん作ってくわ
おにぎりでも握つてくる

澪「あ、待つて。私も手伝つよ。」

律「あ、澪もムギもあるよ。あたしも・・・」

紺「それじゃあ、私も手伝わせてもらひつてもいいかしぃらへ

明久「僕も手伝つよ」

智也「お前らは自分の課題やつとけ。

じゃあ、秋山と琴吹は手伝つてくれ。」

明久と田井中に釘をさしておき秋山と琴吹が手伝つと言つてくれたので
素直に手伝つてもらうことにする。

そういうてある程度の量のおこぎりを作つた。

そして課題の「」」をやつて「」」のはずの二人の元へと向かった。

智也「おこぎり作つてきたぞ。つておいおい」

中に入ると二人はぐつたりしながらおしゃべりをしていた。
雄二と秀吉は真面目に取り組んでいたが……

陽一「疲れた」

明久「オナカヘッタ」

唯「あ、慧君、澪ちゃん、ムギちゃん。ありがとう~

平沢のお礼の言葉にもややこつもの調子がない。

智也「課題写すだけで脳を使い過ぎたのか?」

唯「うん。 そうみたい~」

より一層ぐつたりとする平沢。

智也「で、平沢は別として陽一。

お前はこんなもんじやぐつたりするはずないだろ。」

陽一「おう。でもこの4人がぐつたりしてるから流れで僕もな。
どうせお皿い飯の間は休憩なんだから問題ないだろ」

智也「はいはい、じゃあととと食べて、さつやと課題終わらせる
ぞ」

持つてあがつてきたお皿を机の上に置いた。

みんな本当にあせっているのかテキパキと食べて課題に取り掛かる。

こんな調子で部活されたらのんびりできないから困るな。

などと考えながら俺も食べ終わり課題の手伝いに入った。

～午後3時（課題完了率55%）～

周りを見渡すと田井中と琴吹と平沢、康太、陽一の5人が
眠そうな顔をしている。

秀吉と雄一はすでに自分の課題を終わらせ明久たちの課題を手伝
てもらっている。

智也「なあ、みんな一回休憩しないか？」

俺がそう持ちかけると、

「ダメ！」

「しよう！」

2つの声に分かれた。

ちなみに先の「ダメ」のほうは秋山一人で、
あとの一「しよう！」は残りの全員だ。

澪「おい、みんな！そんな暇ないだろ！まだ半分くらい残つてゐる
に」

休憩に傾きかけた空気を元に戻そうとするが、

律「え～いいじゃん。休憩でもしないと集中力切れてきたし。」

紬「あ、私、ケーキ持ってきたの。みんなで食べましょ。」

琴吹のケーキといつも言葉で休憩が決まった。

唯「わーい、ムギちゃんのケーキだ。」

雄二「みんなつてことは俺たちの分のケーキもあるのか？」

俺たちは軽音部のメンバーじゃないのに良いのか？」

紬「ええ、もちろん。」

家にあっても余らせてしまつからみんなに食べてもらつたほう
がこいのよ

雄二「「そつか、ならいただく」

秀吉「すまぬの。いたぐのじや」

皿を並べそこに琴吹がケーキを置いていく。

『「いただきます。』

みんな一斉に手を合わせた。

唯「ん~幸せ~。このために生きてるって感じだよね」

明久「そうだね~幸せだよ~」

智也「お前らの人生軽いな」

秀吉「これは本当に美味しいのじや」

康太「……美味」

雄二「これは確かに美味しいな」

澪「これ食べ終わったら、ちゃんと課題するからな」

唯「大丈夫だよ」

律「そうそう。大丈夫だつて」

どこからともなくあふれてくる自信がある平沢と田井中。

～午後8時（課題完了率100%）～

唯・律・明・陽「終わった……」

紺「ふう～」

雄一「疲れたな……」

秀吉「せひこんなことさせなさい」

澪「でもこれで安心だな」

智也「せっかくの夏休み最終日が・・・・」

課題を片付けなければいけない人は喜び、手伝わされた人は疲れた顔をしている。

陽一「いや～助かったよ智也」

明久「本当にありがとう智也」

智也「…………貸しえだからな」

そんな」としても夏休み最後の日は帰つてこないけどな。

澪「ま、何はともあれこれで一安心だな」

秋山は俺に比べたらまだまだ余裕だ。

律「やつぱりモの家に来て正解だつたな」

唯「うん。たぶん私と慶だけじゃ今日中に終わらなかつたもん」

智也「受験生の妹に手伝つてもひつもひつだったのかよ・・・」

俺はほそつづいた。

秋山と琴吹はいそと帰る準備を始めた。

智也「何だ、もう帰るのか?」

澪「ああ、もうそろそろいい時間だしな。

それにあんまり長くいると智也の家族にも迷惑だろ?」

智也「まあ時間なのは時間だけど別にそんなに迷惑じやないぞ。

俺一人暮らしだしな」

雄一「一人暮らししか羨ましいなウチなんか・・・・・・」

雄一はそういうと遠く目をしていた。何があつたんだ?

紬「あら、ううなの。でも私迎えをもつ呼んじやつたからやつぱり帰らなくちや」

唯「じやあ、私はもう少し居ようかな」

琴吹と秋山は帰るつもりだと想つただが、

律「お、じゃああたしも

陽一「僕も近所だからもう少し居ようかな

明久「僕ももう少し居ようかな

その他の課題が残つてた組の4人はまだ居座るようだ。

澪「いり、律。帰るぞ

律「ん~そうだな。じゃあ帰るか

田井中は秋山に言われるとあいつあいつあきらめた。

智也「平沢と明久と陽一はとっとと帰れよ。

明日から学校再開なんだからとつとつと帰つて準備でもして早く寝る。

新学期初日に遅刻なんてするなよ

唯「う~、もう学校なんて嫌だ~

学校」と批判するところがキッぽいことをする平沢。

澪「ほら唯、そんなこと言つても学校はなくならんんだから。早く

帰る

唯「う~、仕方ないね。早く帰つて憂に飯作つてもひまつとい

みんなぞろぞろと俺の部屋を出て玄関に向かつ。

智也「やべじや、おまえがおれよ

澪「ああ、じやあ智也また明日学校でな

澪がみんなの代表みたいな感じで囁く。

澪「それじゃあお邪魔しました。」

智也「お邪魔しました。」「

みんなは秋山に続いて小学生の隣りのあこわつのよひに話をかわした。

智也「ねい」

これでもう明日から新学期が始まっちゃうな。

あーもう、面倒だな。

顧問探し？

II—>... III—>...

智也「アチイ……」

陽一「9月なのに何でこんなに暑いかね……」

智也「知るかよ……残暑だろ……」

本日9月中旬。

『どうした?』と地球に問い合わせたくなる様な暑さが続く。

夏休みが終了し、2学期が始まり、
学園祭に向け盛り上がる筈の我が文月学園は、
この暑さのせいでイマイチ盛り上がりに欠けていた。

俺は暑さが苦手なので（寒いのも苦手）参つてゐなか
陽一と廊下を歩いていた。

ちなみに今の時間帯は放課後。

本来なら部活に行つてるが、陽一が課題を全く同じで同じてしまつ
ていたので、
見事に担任から説教をくらひ部活を遅刻中。

そして職員室からの帰りの廊下をダラダラと牛歩してこないと止まらない。

その時…

ガラツ

俺達の行き先にある教室のドアが開き、とある人物が出てきた。

和「あつ 中川君、春原君」

陽「おつ 和ちゃん!」

智也「…アチイ」

涼しい顔をした真鍋だ。

陽「何で「…んなと」るから、和ちゃんが出てくんだ?」

和「何でって、「…」生徒会室よ?」

陽「な又ー?」

そりゃわれ、教室名が書かれているプレートを見上げる。

【生徒会室】

陽「わあーお…」

智也「…あつたんだな…生徒会室…」

和「入学して五ヶ月経つてるわよね…」

真鍋が呆れ声と共に俺達を見てくる。

仕方ないだろ…生徒会なんてそんな堅苦しい空間、用もなければ行かないし。

場所なんて知らなくて当然だろ?」

和「てゆうか中川君、なんて格好してるの?」

智也「…ん…?」

俺を爪先から頭のてっぺんまで見て、やはり呆れたような感じで言つてくれる。

只今の格好。

夏用の制服。

ズボン。 膝ぐらこまで捲り上げ。

シャツ。 ボタン全開。 中に着ているTシャツを露出。

右手。 安物扇子。

中川智也 現在で出来限りのクールビズ中

智也「…何が問題でも？」

和「ちやんと着なさいよ制服」

智也「…クールビズです」

和「やつ過ぎだ…」

だつたらこの暑さをなんとかしてほしー。

地球上に气温を下げるよう懇願してちょいだいだ。

ちなみに陽一は普通に制服を着用している。
バカのくせに…

和「まあ、良いわ。今から軽音部に行こうとしてたから
…智也、ちょっと時間良いかしら？」

智也「…別にいいけど何？」

和「軽音部について重要な話があるの」

智也「重要な話？」

和「ええ、だから中で…」

智也「？」

和「さつてチラシと陽一を見る。

ああ…邪魔なんだなコイツが。

軽音部について重要な話だから部外者の耳に入っちゃマズイしな。

智也「陽一、ハウス」

陽一「俺は犬か！」

智也「じゃあ、お前ん家の近くの公園で一人でカバティでもしてろ」

陽一「何でそんな寂しい事しなきやいけねエんだよー。
つかハタから見たら変人じやねえか！」

智也「だからだよ」

陽一「誰が変人じやーー？」

智也「おつ、陽一窓の外に可愛い女子高生がいるぞ」

陽一「どーー？」

智也「ほら、アソコ。今行けば話べらじこできるかもよ」

陽一「マジか！？」智也「ありがとうーすげに行つてくるぜーーー」

俺の嘘とか気づかず。
陽一はそういう駆け出していくた。

さて……邪魔者は去ったな……

和「じゃあ、お話しましょづか」

智也「了解」

真鍋は普段どおり冷静に対処し俺を生徒会室に入れてくれた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

軽音部の重要な話を聞くために初めて生徒会室に足を踏み入れる。
真鍋以外は誰もいなかつたらしい。

普通の教室とあんま変わらんな…

和「单刀直入に言つわね」

俺が適当な席に座ったのを見計らつて真鍋が切り出した。

智也「ああ」

和「軽音部は部として認められてないわ」

智也「…………はあつー?」

「ういう事である。

今なんて言った?

軽音部が部として認められてない?
なんだ?

智也「どういう事だよ？」

部員4人揃つたら部として認められるんじゃねエのかよ？」

確か誰かがそう言ってた筈だ。

だから平沢が入部した事によつて廃部は免れた。

それに俺と明久も入部したから6人だ。

既定人数が足りないつてことはない筈だ。

和「うん そうなんだけどね…」

智也「つかなんで、真鍋がこの事知つてんだ?」

いくら生徒会の一員だとしても、真鍋はまだ1年だ。

こういう事は三年とか生徒会長が斡旋するもんじゃねエのか?

そして何故、軽音部が部として認められてない事を知つているのか?

生徒会には何でも情報が入つてくるのか?

ここにはヴェ○ダもあるのか?

和「ああそれはね、軽音部の誰かが学園祭のステージを
借りるために職員室に来たみたいなの」

智也「誰か?」

和「それは分からぬけど…そこで部として認められてない事が分
かつたみたい

それで生徒会にも連絡がきて、ちょうど私しかいなかつたから
私が取り合つたの」

智也「なるほどね…」

納得だ。ヴ○ーダじゃなかつたか。

智也「で？結局原因はなんなんだ？」

和「部活申請用紙が出てないからだと思つわ」

智也「部活申請用紙？」

和「ええ、コレよ」

そう言つて棚から一冊のファイルを取り出し、俺に渡す。

智也「……」

それをパラパラとめくつっていく。

そのファイルの中には、『クラブ活動申請書』という紙が何枚もあつた。

『茶道部』『演劇部』『吹奏楽部』『合唱部』『美術部』etc.

様々な部活の用紙があるが『軽音部』のものは見当たらなかつた。

智也「…ねHな」

和「それが提出されないと人数が集まつても

部としては活動出来ないので

智也「…じやあ何か？今まで俺達は勝手に準備室を使ってたつて事か？」

和「そうなるわね…」

それはまあ、あんだけ私物（ティーセット等）を持ち込んで
何も言われなかつたもんだな。

和「申請用紙は生徒会からその部の部長に渡した筈なんだけビ…」

智也「えつ？」

今、聞き捨てならぬ言葉があつたな。

『部長に渡した』

軽音部の部長は田井中だ。アイツ出しねHのか…？

和「軽音部の部長って誰なの？」

『田井中だ』と口を開けいつとした時…

バンッ！

唯「たのもーつ…！」

律「部長は私つ…！」

生徒会室のドアが勢いよく開き、
何故かポーズをキメる平沢と同じくポーズをキメめ、
タイミング良く部長を名乗る田井中と…

紺「失礼します」

正しい入室作法の琴吹が入つてきた。

智也「あれだ

和「ああ…」

田井中を指差す俺。苦笑いの真鍋。

唯「あれ? 和ちゃん?」

律「それにトモもいるじ

唯「あつ 本當だ~トモ君に和ちゃん、なんでここにいるの?」

智也（俺はともかく真鍋は当然だろ。前言つてたじゃねえか）
が、その考えは甘かつた…

和「なんでつて…生徒会に入つてるからだけど…」

唯「えつ! ?す!」いね! 流石、和ちゃんだよー…

和「生徒会に入つたつて言つた筈なんだけど…」

唯「あれ? そりだつけ?」

忘れていたんだな…

律「お前ら本当に幼馴染みか…」

田井中がポソリとシッ 「さだのを心の中で同意した。

紺「智也君はどうしていいにしや…」

智也「…ん?」

俺が田井中の発言に心の中で同意し拍手を送るつかとして「…」
琴吹に話しかけられた。

律「ま、まさかトモ…生徒会に引き抜きをされてたんじや…」

唯「ええつー?だ、ダメだよ和ちゃん!」

トモ君は軽音部なんだから、いくら和ちゃんの頼みでも、
それは聞けないよ?!

和「なんの話?」

智也「気にしないほうがいいぞ」

顧問探し？

和「やつを中川君にも説明したんだけど、部活申請用紙が提出されてないから

軽音部は部として認められてないの」

訳の分からん誤解をしている平沢と田井中をほつとして
琴吹に何故生徒会に来たか尋ねると、
軽音部問題（長いのでこれで統一）が琴吹達の耳に入り
真相を確かめるために生徒会にきたらしい。

あと、秋山は部室でスキルを発動中らしいので置いてきたとのこと。
明久は秋山を落ち着かせるため残った。
ちなみに俺がここにいる理由は説明済み。

律・唯・紬「「部活申請用紙？」」「

真鍋の言葉を聞き、未だに何か言つてた平沢と田井中が本題に戻り、
琴吹と3人で声を揃える。

律「そんな話は聞いてないぞーーー！」

智也「聞いてないじゃね？ よーお前に生徒会が渡した筈だ。ビリや
つた？」

律「……いや～そんなもの、貰った記憶が……」

澪「貰つてんだろう……」「

智也「おひ……秋山……」

すつとぼけた事を言つ田井中ごどす黒い怒りのオーラを纏つた秋山
登場しぷしひむ。

律「ん？…………あひ……思い出したー」

「そうこえれば部屋の机の中に、入れっぱなしだー！」

澪「やつぱりお前のせいかああひ……」

律「イダダダダッ！－！」メンナサイ！－！」

紬「澪ちゃん、つちちゃんにも悪氣があつたら、ある意味大物だ」

智也「そりゃそりだ、これで悪氣があつたら、ある意味大物だ」

澪「ムギは甘いんだ！智也も訳の分からん事言わないー！」

智也「とほりちりかよ！」

紬「まあまあまあまあまあまあ……」

唯「6回」

明久「6回とか数える場合じゃないよね」

そんな様子を見ていた真鍋はボソッヒ

和「なんていうか、軽音部つて唯にペッタリだと想つわ」

唯「え？」

言われた意味を呑み込めていない平沢の頭の上には、マークが飛び交っている。

智也「だううな。こんな部は他にはないと想ひな」

和「まったくその通りだわ」

そういう真鍋はため息を一つつき、仕方ないといった顔になつた。

和「…しじうがないわね。私がなんとかしてあげるわ」

「　　」本当つー？　　」「

真鍋の鶴の一聲で喧騒が止み、有望な様子で真鍋を見る5人。

智也（さすが真鍋だな。頼りになるなあ）

真鍋が申請用紙を取り出し、必要事項を記入していく。

和「軽音部つと…部員は6人……で、顧問は？」

唯・律・澪・紬「　　「顧問？」」「

明久「ん？」

智也「そつこや顧問見たことなかつたな……」

和「あなた達…」

用紙から顔を上げ、そんな事を言つ真鍋。

和「とにかく顧問がいないと、申請用紙は提出出来ないわ」

律「じゃあ、さわ子先生に頼んでみよつぜ」

智也「お前…そんな楽観的に言つなよな」

澪「そもそもの原因は律だろ」

明久「でも先生って吹奏楽部の顧問やつてなかつたつけ？
引き受けてくれるのかな？」

明久の疑問も最もだ。

吹奏楽部と軽音部の顧問の掛け持ちなんて簡単に了承してはくれないだろ。

ましてやコッチは少人数の弱小部だ。

吹奏楽部が何人いるのか知らんが、間違になくウチよりも多いだろうし、

コンクールで賞とか取つてそつな（推測）強豪の吹奏楽部と廃部寸前だった軽音部。

軽音部の顧問をやるメリットなんてないしな。

紬「とりあえず、山中先生に聞いてみましょつ？」

澪「そうだな…他に頼れそうな先生いないし…」

智也「俺達の担任は？」

和「あの先生はオカルト部の顧問よ」

唯「和ちゃん何でも知ってるね～」

和「自己紹介の時言つてたじゃない…」

智也・唯「あれ？ そうだけ？」

和「聞いときなさいよ…」

そんな人生で何の役にも立たなさそうな情報、一々覚えてねエよ。

智也「明久の担任は誰だっけ？」

明久「……鉄人だよ」

唯「……鉄人？」

澪「そんな名前の先生いたか？」

智也「……マジか？ あの筋肉教師だったのか」

明久「うん、そうだよ」

智也「よし、他の先生にしよう…」

明久「もちろんだよ！ あんなのが顧問だと僕耐えられそうにないよ

！」

智也「それは俺も同じだー！」

澪「どんな先生なんだ……」

律「じゃあわ子先生に会って行けばいいや。」

話がまとまりたって、田井中が声をだし、生徒会室を後にし職員室に向かう事。

顧問探し？

律「あつれー、いなーなー。」

俺たちは、山中先生を探しに職員室まで来ていた。
もつとも、職員室に入っているのは田井中だけだが。
失礼しました、と言つて田井中は職員室から出てきた。

律「なあ、唯。さつきまで山中先生いたのか？」

唯「うん。さつき、絆創膏もらってに来たときはいたよ」

指に張られた絆創膏を見せてくる。

智也「まあどうしたじろーの時間帯なら
まず帰つてることはないからその辺探し回ればいいんだ。
それか、さつき明久が言つてたように
吹奏楽部の顧問なら第2音楽室あたりにいるんじゃないかな？」

唯「おお、トモ君頭いいね」

平沢は称賛の眼差しを送つてくるがそんなに大したことじゃないだ
ろ。

律「あ、いた」

田井中は一番後ろを歩いていた俺の方向を指さす。

振り返つてみると確かに一番奥の階段の前で何やら数人の生徒たちと会話していた。

俺がそつちに歩いて行こうとしたら田井中に肩を持たれた。

律「トモ、ちょっと待つて」

智也「何でだ?」

律「いいから、いいから」

田井中は1年B組の教室に入つていった。
出てきたときにはノートを2冊持つて出てきた。
そして、待つてといった割には俺たちを差し置いて
先に一人で向かつていった。

律「何をしでかすつもりだ?」

澪「さあ?」

秋山も首をかしげる。

俺たちは田井中の行動に不思議がりながらも一応後をついていった。

律「山中さわ子。我が校の音楽教師である。

その綺麗な顔立ちとやわらかな物腰で、
生徒だけでなく教師の間でも人気が高い。

更に楽器の腕前や歌声も素晴らしい、

ファンクラブが存在するほどの人気がある

田井中はくるっと丸めた自分のノートを双眼鏡代わりにして
何故かナレーションのような話しかをしていた。

しかも内容は山中先生を持ち上げているような内容だ。

智也「持ち上げ作戦かよ」

俺は山中先生には届かない程度でボソッと言った。

山中「あの・・・やつきから何を言つてゐるの?..」

当然俺たちの事情を知らない山中先生は疑問に感じる。平沢たちが田井中の周りに集まる。

唯・律・澪・紬「「「「先生!」」」

山中「はいっ!」

4人の勢いにのまれて返事をする。

律「軽音部の顧問になつてください!」

田井中が代表になつて切り出した。

山中「まだ顧問居なかつたんだ・・・」

そういう先生の言葉の中には少し呆れが混じっている。

紬「先生しか頼める人がいないんです」

澪「お願いします」

秋山や琴吹も説得するが、

山中「ごめんなさい。なつてあげたいのは山々なんだけど、
私吹奏楽部の顧問をしているから掛け持ちはちょっとと・・・」

あえなく沈没する。

明久「やつぱりダメかなあ」

智也「難しいだろうな」

そして田井中は、

律「今まで声をかけてきた男は数知れず」

また持ち上げ作戦をする。

山中「だ、だからおだてても無理ですー！」

しかしこれもあえなく失敗。

明久「顧問つていつも寒質名前だけですから」

智也「練習どかも自分たちで今までやつてきたし、後は顧問の先生
だけなんですよ」

仕方がないので俺と明久も加勢する。

澪「時間なら取らせませんー！」

秋山がさらに後押しをする。

律「やつやう、ここに名前書いて判子押すだけ。ね、簡単でしょ」

田井中は山中先生の顔の前で部活申請用紙をひらひらわせる。

その言葉、この状況を知らない人が聞いたら絶対怪しい勧誘に見えるな。

などと考えつつもこの後もしまだ断られたときの対策を考えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4050z/>

バカとけいおん！と召喚獣

2012年1月12日19時57分発行